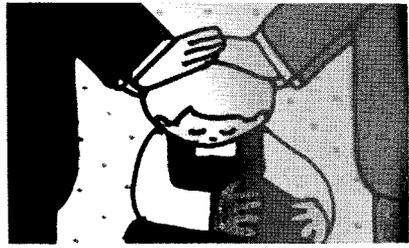
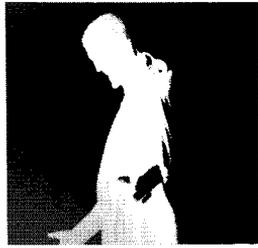
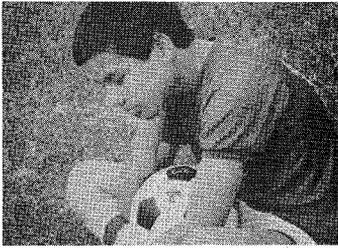


聖徒の道

1983年9月20日発行（毎月1回20日発行）第27巻第9号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道 9 1983





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バックナー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ビネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：

デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：

ボニー・ソーンダース

デザイナー：

ロジャー・ギリング

レイアウト・デザイン：

マイケル・カワサキ

もくじ

「かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。…ゴードン・B・ヒンクレー…」	1
質疑応答……………ジャクソン・マクニール・ジュニア…	11
子供の自尊心を養う……………ジェームズ・W・ヒンクレー…	14
幕のかなたより……………レイ・J・スティーブンソン…	20
私の時間……………エロイーズ・ヒンクレー…	23
奉仕の召し……………ジョン・A・トーマス…	30
キリストと創造……………ブルース・R・マッコンキー…	31
モルモネード：負けないて！……………	45
これを持ってお行きよ……………ナネット・ラーセン…	46
エリヤって、どんな人……………パット・グレアム…	52
まちがいがさし……………ロベルタ・L・フェリス…	56
どうすればいいの？……………マリリン・バートン・アターク…	57
チャーチニュース／ローカルページ……………	58

■表紙説明：宇宙から見た地球(写真提供：米国航空宇宙局)

1983年9月号 聖徒の道 第27巻第9号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定 価 年間予約／海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA061AJA Printed in Tokyo, Japan.

©1983 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急に渋谷ブックセンターにご連絡下さい。●「聖徒の道」のご注文・お支払いなどの連絡先……〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部渋谷ブックセンター/☎03-464-1617(代)

「かねて言われたとおりに、
よみがえられた
のである」



第二副管長
ゴードン・B・ヒンクレー

私は少し前、一連の面白い書物を読み
ました。その中には、ナザレのイエ
スの物語から神秘的な要素を取り除こうと
する試みに関する、アメリカ、イギリス、
ヨーロッパの神学者たちの才気あふれる論
文が載せられていました。ある才能豊かな
プロテスタントの信者はこう書いています。

「古くからの教えに疑いを差しはさむ神
学者たちから、まことに厄介な問題が投げ

かけられている。彼らの言^{げん}によると、神と
いう言葉は多くの人々にとって、意味のない
言葉になってきているから、捨て去るべき
だというのである。

イエスとは何者かという、自由主義的神
学者が持ち出したこの問題は、元を正せば
昔から何度も繰り返されてきたものであり、
キリスト教会を分裂させたものでもある。

宗教改革者たちは……真理の唯一の源泉

●「かねて言われたとおりに、
よみがえられたのである」

として聖書に立ち返ったが、彼らの聖書からは、編集の段階で、奇跡的な出来事は削除され、それに関して読者を当惑させるような注解が付けられていた。ある者はそれを非神話化論と言い、ある者は合理的解釈と呼ぶ。

この新しい波が揭示しているのは、宗教とは名ばかりのキリスト教であり、その信仰の基盤はある種の哲学体系である。」
(*Fortune*, December 1965, p.173)

このように、現在のある神学者たちは、主からその神性をはぎ取ろうと画策してきました。そしてそのうえで、なぜ人々は主を礼拝しようとしぬのかと首をかしげているのです。彼らはイエスから神性という衣をはぎ取り、自分に従う人々に、イエスをただの人間としてしか見せていないのです。彼らは自分の狭い考えに合わせて、イエスを作り変えようとしています。そして、その過程において、主が神の御子であることを否定し、この世から義の王を奪い取ってきたのです。

このかなりの影響を持つ偽りの聖書解釈は、いつの時代にも、特に若人の信仰を揺さぶり、多くの人々をえじきとしてきました。その解釈と、彼らに及ぼした大きな影響力とについて読んでみると、古代の予言者アモスを通して語られた主のみ言葉が、新たな明快さをもって迫ってきます。

「主なる神は言われる、『見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくでもない、主の言葉を聞くことのききんである。』

彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、

しかしこれを得ないであろう。

その日には美しいおとめも、若い男もかわきのために気を失う。
……必ず倒れる。再び起きあがることはない。』(アモス 8 : 11-14)

これらの言葉は、現代の多くの人々の状態を実によく言い当てています。若い人だけでなく、心に喜びを与えてくれる信仰を求めながらも、与える側の問題のゆえにそれをはねつけ、渇きのために気を失い、倒れ、再び起き上がることのないすべての人々の状態を表わしています。

私たちはこのような人々に厳粛に証したいと思います。神は死んだという人々がいますが、神は死んではおられません。

私たちはイエス・キリストこそ信仰の要となる御方であると信じています。この教会は正式には末日聖徒イエス・キリスト教会といえます。私たちはイエス・キリストを主、救い主として礼拝しています。聖書を神のみ言葉として受け入れ、メシヤの降臨を予言した旧約聖書の予言者たちは、神の靈感の下に語ったと信じています。そして、神の御子、すなわち肉において御父の生みたもう独り子の誕生、教えと導きの業、死、復活などの出来事を書き残したマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの記録を誇りとしています。古代のパウロのように、私たちは「福音を恥としない。それは……救いを得させる神の力」(ローマ 1 : 16) だからです。また、ペテロのように、イエス・キリストのみ名以外に、「わたしたちを救いうる名は……天下のだれにも与えられていない」(使徒 4 : 12) と宣言しています。

私たちが新世界の証として受け入れてい

空の墓は、イエスが神の御子であることを証し、 永遠の生命を確かなものにしていきます。

るモルモン経は、かつてこの西半球に住んでいた予言者たちの教えを伝えると共に、ユダヤのベツレヘムで生まれ、カルバリの丘で亡くなられた御方を証しています。モルモン経は、確たる信仰を持たずに揺れ動くこの世に与えられたもうひとつの証であり、主の神性をはっきりと証しています。冒頭の部分には、1500年前のアメリカ大陸に生きたひとりの予言者の言葉が書かれています。そこには、この記録の目的は、「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させることである」とはっきり述べられています。

現代の啓示、教義と聖約の中で、主は次のような言葉で、御自身についてはっきりと宣言しておられます。「われはアルパにしてオメガなり。主なるキリストなり。すなわちわれは始めにして終りなり。世の贖い主なり。」(教義と聖約19:1)

贖い主は全人類が生きられるように、御自分の命を捨てて痛ましい代価を支払われました。教義と聖約のこの宣言は、私たちにその代価を決して忘れてはならないことを気付かせてくれます。ゲツセマネでの苦悶、法廷におけるひどい嘲り、肉を引き裂く残酷ないばらの冠、ピラトに死刑を要求する暴民たちの叫び、手と足を釘で貫かれた時の身の毛もよだつ苦痛、あの悲しみの日に十字架上で味わわれた身を引き裂くような苦しみ、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずに

いるのです」(ルカ23:34)という叫び、私たちはこれらのことを決して忘れてはなりません。

主は十字架という拷問の道具で苦しみを受けました。十字架が用いられたのは平和の君を滅ぼすためでした。病人を癒し、盲目の人の目を開け、死者をよみがえらす奇跡の業をされた御方に対する報いが、この恐ろしい道具だったのです。そして、主は荒涼としたゴルゴダの丘の十字架の上で、息を引き取られました。

私たちは、救い主にして贖い主たる神の御子が、私たち一人一人のために身代わりの犠牲となられたことを決して忘れてはなりません。ユダヤ人たちの安息日の前日の夕べにその場にいた人々は、主の骸が降ろされ、借り物の墓の中に急いで葬られるのを見た時、夕暮れの闇の中に希望を奪い去られました。最も熱心で賢明な弟子たちもその例外ではありませんでした。彼らは主が以前に言われたことを理解していませんでした。信じていた主が死に、憧憬、信仰、希望のすべてを寄せていた主が帰らぬ人となってしまったのです。かつて、永遠の生命を語り、ラザロを墓からよみがえらせた主も、今やその悲しみに満ちた短い生涯を終え、すべての人と同じように世を去ってしまったのです。その生涯は、はるか昔、イザヤが予言した通りのものでした。「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。……

……彼はわれわのとがのために傷つけら



れ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平和を与え……」（イザヤ53：3、5）今や主はこの世の人ではありませんでした。

主を愛していた人が、今の土曜日^かに当たるユダヤ教の安息日の長い時間を、主の死を考えてどのような気持ちでいたかは、想像することしかできません。

そして、今日では主の安息日と呼ばれる、週の初めの日が来しました。悲しみに沈んでその墓へやって来た人々に、主に仕えるみ使いが宣言しました。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。」（ルカ24：5）「もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。」（マタイ28：6）

人類の歴史中、最も偉大な奇跡が起こったのです。主は先に、「わたしはよみがえりであり、命である」（ヨハネ11：25）と弟子たちに言われましたが、彼らはそれを理解することができませんでした。しかし、今や彼らはその言葉の意味を悟りました。悲しみ、苦しみ、寂寞の中に息を引き取られた主が、その3日後に、すべての眠る者の初穂として力とうるわしさと命の内によみがえり、あらゆる時代の人々に、「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」（Iコリント15：22）という保証を与えられたのです。

カルバリの丘にいたのは、死を迎えたイエスでした。しかし、主は墓の中から、生けるキリストとして現われられたのです。十字架はユダの裏切りの悲しい結末であり、ある意味でペテロの否定の結果でもありま

した。しかし、今やその^か空の墓は、イエスが神の御子であることを証し、永遠の生命を確かなものにしてあります。そして、未解答のままになっていた「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」（ヨブ14：14）というヨブの問いかけに答えを与えたのです。

主はその死によって、人々から忘れられていたかも知れません。良くて、多くの偉大な教師の中のひとりとして、歴史書の数行にその業績が書き留められていたくらいかも知れません。しかし主はよみがえられ、命の主となりました。弟子たちはイザヤと共に、確かな信仰を喜び歌ったことでしょう。「その名は、『靈妙なる義士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる。」（イザヤ9：6）

そして、次のヨブの言葉も成就されたのです。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる。

わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、わたしは肉を離れて神を見るであろう。

しかも私の味方として見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる。」（ヨブ19：25-27）

主は今や、命を治めるだけでなく、死をも治める御方でした。ですから、復活された主を見た時に、マリヤが叫んだ「ラボニ」という言葉は、実に当を得たものだったのです。死の苦痛は除かれ、墓は勝つことができませんでした。

臆病なペテロも人が変わりました。また、あのうたぐり深いトマスでさえ、「わが主よ、わが神よ」（ヨハネ20：28）と、厳粛に

●「かねて言われたとおり、
よみがえられたのである」

奇 跡的に思える数多くの事柄に囲まれて毎日常生活している私に とって、イエスの奇跡を信じるのはいともたやすいことです。

心の底からの宣言をしました。かの驚くべき時に主が語られた、「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20：27)という言葉は、いつまでも彼らの心から離れることはありませんでした。

それから、主は多くの人々に姿を現わされました。パウロは「五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた」(Iコリント15：6)と書き残しています。

そして、西半球には別の民が住んでいましたが、主はこの民のことについても、以前に語っておられました。彼らに「天から出てくるような声が聞えた……

その声は、「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け」とかれらに仰せになっていた。

群衆は……天を仰ぐと、天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。そのお方は白い衣を召して、降ってきて群衆の中に立ちました。……

時にそのお方は手を伸して群衆に話しかけて仰せになった。

「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。

……起ちてわれに近づけ」と。(IIIニーファイ11：3，6-10，14)

モルモン経のこの素晴らしい記録には、主が古代アメリカの民の間で導きと教えを施された時のことが、数多く記されています。

では、最後に現代の証を見てみましょう。全人類の主は、時の絶頂の神権時代として予言されていたこの神権時代の幕を開けるために、再び地上に來られました。古代に与えられていた真理を新たに回復するために、輝かしい示現の中に、復活された生ける主と、その御父である天の神が、ひとりの少年予言者に現われたのです。そして、雲のように多くの証人がそれに続きました。(ヘブル12：1参照)最初の示現以来、啓示を受け続けてきた現代の予言者ジョセフ・スミスは、次のように厳肅に宣言しています。

「さて、この小羊に就きて為された様様の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちもみな神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76：22-24)

私たち末日聖徒は、神が実在の御方であるという厳肅な証を聖霊の力によって立てている何百万人という証人をこれに加えるものです。彼らはこれまでもそれを証してきましたが、今もなおその証を続けています。

この証を背景として、信仰も行ないもない、破滅的で定見のない混乱した考えにつ



●「かねて言われたとおり、
よみがえられたのである」

いて、もう一度考えてみましょう。知性だけで物事を判断しようとする人々に、幾つか質問をしたいと思います。

主の神性に対する信仰は、20世紀における様々な情報を元にしたものでしょうか。科学や技術が進んだ現代であっても、イエスという奇跡の存在を否定することはできません。それどころか、かつては超自然的、不可能と考えられていたことが、今ほど信じられるようになった時代は、人類の歴史の中にかつて一度もありませんでした。

現代において、何か実現不可能と思えるようなことがあるのでしょうか。

生命の本質とその創造のなぞの解明を始めるまでになった生物学や医学の飛躍的な進歩を知っている人々にとっては、たとえ懐疑的な人であっても、神の子としてのイエスの奇跡的な誕生は確かに以前よりも可能性のあることとして認められるようになってきています。

また、この地球を創造したほどの知識を持っておられる御方が病を癒し、弱っている人を活気づけ、死者をよみがえらせることができた信じるのは、何の難しいことでもありません。中世においては、そういうことを信じるのは難しかったかも知れません。しかし今では、病気の治癒、快復という奇跡は日常茶飯事となっています。それを目撃しながら、果たしてこれらの事柄の可能性を疑うことができるのでしょうか。

居間に座って、宇宙飛行士の月面歩行を見た後で、昇天について考えた場合、それを非常に理解し難いことだと思うでしょうか。

奇跡とは何でしょうか。現代こそ奇跡の時代ではないでしょうか。私がこれまで短い人生の中で見てきた科学の進歩は、私の先祖たちが過去6千年近くにわたって目撃してきたものより大きなものです。

奇跡的に思える数多くの事柄に囲まれて毎日生活している私にとって、イエスの奇跡を信じるのはいともたやすいことです。

しかし、私たちは福音に関心を持っている世界中の友人に、主への証は人類が達成した業績を観察するだけで得られるものではないと申し上げたいと思います。そういった観察は主の誕生、生涯、死、復活に対する理性的な確信を与えてくれます。しかし、それ以上のものが必要なのです。それは、主が聖なる贖い主として担っておられる、比類ない不変の役割に対する知識であり、主御自身と、主が神の御子として私たちに授けられたメッセージとに対する熱い思いです。

この知識と情熱は、代価を支払うなら、だれでも得ることができます。これらのものはこの世的な学問、知識などと相容れるものではありません。哲学書を読んだだけで得られるものでもありません。それを得るためのより確かな方法があります。神に属ける事柄は、啓示の言葉を伝えてくれる、神のみたまによって理解することができるのです。(Iコリント2:11参照)

主に対する知識と情熱は、簡潔な原則に従うことによって得られます。その中から3つの原則を取り上げてみたいと思います。いずれも初歩的な概念で、何度も繰り返し教えられているものですが、応用という点から考えると基本的な原則であり、最も実

霊的な力は、腕の筋肉の力と同じで、栄養を を取り、使わなければ強くなりません。

り豊かな結果を与えてくれるものです。

第1のステップは、主のみ言葉を読むことです。日々忙しい生活の中で、本を読む時間的なゆとりがありません。しかし約束します。私たちが聖典と呼ぶ書物を読むなら、知識と温かな思いを得、喜びを感じることができます。「あなたがたは、聖書の中に永遠の生命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。」(ヨハネ5:39) 例えば、ヨハネによる福音書を、初めから終わりまで読み通してみてください。主御自身に語っていただくのです。主のみ言葉が心安らかな確信をもたらし、主のあら捜しをする人々の言葉を無意味なものとしてくれるでしょう。新世界の契約の書、モルモン経も読んでください。モルモン経は、「イエスは永遠の神にましまして、万国の民に現われたもうこと」に対するもうひとつの証として与えられたものです。(モルモン経のとびらの言)

第2のステップは祈ることです。御子のみ名によって永遠の父なる神と話してみてください。主はこう言っておられます。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。」(黙示3:20)

これは主御自身からの誘いであり、その約束は確かなものです。天から声が聞こえてくることはないかも知れません。しかし

神が安らかな不動の確信を与えて下さることでしょう。

第3のステップは、教えに従った生活をし、主のみ業に働くことです。霊的な力と肉体的な力には共通点があります。霊的な力は、腕の筋肉の力と同じで、栄養を取り、使わなければ強くなりません。

自分の時間と才能を用いて神のみ業に働くならば、信仰は強くなり、疑いは徐々に消えていきます。

主ははっきりと言っておられます。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ7:17) また、神の教えを実際に行ない、主の大義に献身するなら、自分が何者であるかを知り、真理を悟るであろうとも宣言しておられます。

主はニコデモとのあの素晴らしい会話の中で、「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」と言われました。そうしてこう続けられたのです。「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くのかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである。」(ヨハネ3:6, 8)

私たちは、以上3つの提案を実行する人には、これらの祝福が与えられるとはっきり約束します。だれでも、主のみ言葉を読み、主に祈り、主の教えを守って奉仕の業に仕えるなら、疑いを除くことができます。

●「かねて言われたとおり、
よみがえられたのである」

そして、哲学、いわゆる高等批評、現代の否定的な神学などが引き起こすすべての混乱の中を、聖霊の証が輝きを放ちながら出てくるのです。聖霊は私たちに、イエスが肉体をまとしてこの世に生まれたもうた真の神の御子、また、墓からよみがえった世の贖い主、いつの日か地上に来て王の王として君臨される主であることを証してくれるのです。これらのことを知るのには、私たちの特権であり、祝福です。そしてこれらのことを探求するのは、私たちの義務なのです。

神は、私たちがこれらの偉大な真理に対する確信を与えて下さいます。また、神は私たちがその真理を常に実践できるように祝福して下さいます。そして、ほかの人々もその真理に従って、神は実在し、常に近くにいて導きと恵みを下さるといふ素晴らしい知識を得ることができるよう、祝福を授けようとしておられるのです。神が生きておられ、私たちの側にいて導きと恵みを下さるといふことは、すべての人が知っておくべき事柄です。

イエスがユダヤのベツレヘムでこの世に生を受けられた神の御子であること、また、約束のメシヤとしてこの地上を歩き、十字架にかけられ、全人類の罪を贖うための犠牲として御自分の命を捧げられたことを証します。イエスこそ私たちの救い主であり、贖い主です。イエスは人類のただひとつの確かな希望、すなわち、よみがえりであり、命なのです。

ホームティーチャーへの提案

担当家族との話し合いの中で、以下の点

を強調するとよいでしょう。

1. この教会の正式な名称は末日聖徒イエス・キリスト教会である。また、私たちはイエス・キリストを信仰の要とし、主、贖い主として礼拝している。聖書を神のみ言葉として受け入れている。
2. モルモン経は、確たる信仰を持たずに揺れ動くこの世に与えられたもうひとつの証であり、主の神性をはっきりと証している。
3. その空の墓は、イエス・キリストが神の子であることを証し、永遠の生命を保証するものとなった。イエス・キリストは復活によって、命と死を治める主となられた。
4. 復活を証する古代の証言に加えて、予言者ジョセフ・スミスに与えられた示現と啓示、また、聖霊の力によって主の存在を厳粛に証する何百万人もの人人の証がある。
5. 聖典を読み、天父に祈り、主の教えに従い、主のみ業に働くなら、主に対する知識と愛を得ることができる。

話し合いを進めるために

1. 復活について、自分が感じていることを話す。家族にも感じていることを話してもらおう。
2. このメッセージの中に、家族に読んでもらったり、話し合ったりするとよい聖句や言葉はないだろうか。
3. 訪問する前に、家長と話し合っておく必要はないだろうか。復活の教えに関して定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

子供の自尊心を

ジョンとデビッドはどちらも9歳で、良い友達同士です。体の大きさはほぼ同じですが、サッカーを始めると、ふたりの大きな違いが出てきます。ジョンは活発に動き回りますが、デビッドは離れた所から静観しているという具合です。ジョンは得点を入れようと一生懸命ですが、デビッドにはそんな気がありません。チャンスをつかもうとするところが見られないのです。

ふたりのこの違いは、様々な面にはっきりと出てきます。ジョンは何か新しいことに対しても、熱意を持って取り組み、それを上手にやり遂げようとします。デビッドの方は大体において悲観的な考えが強く、失敗する恐れのあることにはほとんど手を出そうとしません。

子供が持つ考えの中で一番大切なのは、自分自身をどう見るかという点です。しっかりとした自尊心を持っている子供は、楽天的な考え、自信、成功への期待感を持って、世の中を見ます。しかし、自尊心を持たない子供は、自分の考え、能力に自信が持てず、人生の中で遭遇する様々な場に対して非常に消極的になる傾向があります。

子供は皆、自分は人々から愛され、能力もあるのだという気持ちを持つ必要があります。こうした感情が出てくると、自尊心

はさらに高められますが、逆の場合は自尊心がなえてしまいます。

両親といえども必ず子供に自尊心を持たせることができるわけではありません。また、子供に自尊心がないからと言って、それがすべて自分の責任だと考える必要もありません。しかし、子供の自尊心を養うために、親にできることがあります。その中の幾つかを挙げてみます。

1. 子供に、人は神の霊の子であり、神のようになる可能性を秘めていることを教えて下さい。自分が何者であるかを正しく理解することによって、私たちは自分を愛することができるようになります。私たちは文字通り天父の霊の子であり、一步一步、神のような者となる可能性を持っています。

人は天父の姿に似せて造られているように、霊的にも少しずつ天父に似た者に成長していく力を持っています。この真理を、絶えず子供たちに教えて下さい。また、神が私たちを御自身の子供として愛し、成功して欲しいと願っておられることも教えて下さい。

2. 弱点や短所に心を奪われず、前向きな姿勢で子供に接して下さい。すべての子

養う

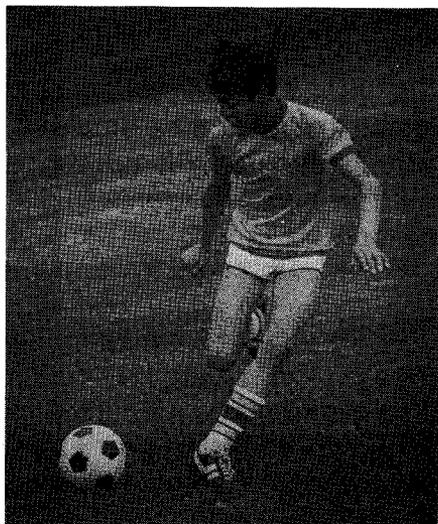
ジェームズ・M・ハリス

供が、一様に人から好かれ、愛される資質を持ち、能力に恵まれているとは限りません。しかし、両親の接し方は、自分自身を受け入れようとする子供の気持ちに大きな影響を与えます。最近のことですが、手入れの行き届いた立派な家に住むある母親が、自分の子供のひとり「ほんとうにだめな子」と言ったそうです。それもその子供がいる時に、客の前で言ったそうです。その女の子は母親の言葉をそのまま信じて、自分は「ほんとうにだめな子」と思い込み、それなりのことしかしなくなるかも知れません。その危険性は十分にあります。

しかし、幸いなことに、子供というのは、親が口にする偽りのない積極的な言動も受け入れるものです。子供たちにどのような欠点があろうとも、自尊心を育むように努めて下さい。目鼻立ちが特に美しいわけでもないのに、明るい笑顔と性格で周囲を楽しくさせてくれる女の子、また、目が見えなくても、勉強がよくでき、人気のある男の子、そのような子供たちが私たちの周りにはいます。こういう子供たちは大抵、温かたで、愛に満ちた家庭を持っています。そしてその両親たちは、嘲りや哀れみで接するのではなく、子供を貴い、可能性を秘めた存在として受け入れています。

3. 他の兄弟姉妹と比較することを避け、子供たちの個々の能力に目を向けて下さい。ジュディーは両親を困らせるようなことは何もせず、教会の集会にもいつも出席しています。セミナーのクラスでも楽しくやっています。それに活発で良い友達がたくさんいます。ところが妹のパティーはそれとはまったく対照的で、両親も頭を悩ませています。パティーは教会へは行きたがらず、いつも教師を困らせています。セミナーに登録はしていますが、それも親から強く言われたためで、ほとんど出席していません。近づいていく友達も、教会に不活発で、教えに対して批判的な子供たちです。

パティーは、自分はどうやっても、姉より立派になって人からよく思われるようにはなれないと思っていましたが、無意識の内に、何か別の方法で認められたいと思っていました。ところが悪いことに、両親は



●子供の自尊心を養う●

いつも姉を模範にしなさいと言って、ふたりを比較し、事態をさらに悪くしていたのです。姉とは違う、独立した人格として認めて欲しいと強く願っていたパティーは、それに強く反発しましたが、同時に、自分の行動に罪悪感を覚え、自尊心を無くしていきました。

このように悪い結果につながる比較をしている親が随分います。「どうしてお前はジョンみたいにできないんだ」とか、「サンドラだったらそんなことは絶対しないわよ」などと、皆の前で意識的に言う親もいるようです。無意識の内に、そういう比較をしている親もいることでしょう。しかしいづれにしても、そういった言葉は大抵、子供の耳には、「お前はほかの兄弟みたいに可愛いくもなければ、できも良くないね」と響いているのです。普通、親は良い模範を見せようとして比較をするのですが、そのような比較は子供の自尊心を壊してしまうことが多いのです。

4. 子供に成長のための機会を与え、様々な事柄を自分の力でできるように励まして下さい。子供が自信を持ち、能力を身に付け、自立できるように助けることは、親の務めのひとつです。この訓練は自然に、また徐々に行なわれていきます。これは子供が幼い内から始まります。子供は何か新しいことを覚えると、それを何度でもしてみたいと思います。この欲求を抑えると、大声を上げて不満を爆発させることもあります。アンダーソン姉妹の例を挙げましょう。彼女は1歳になるキャサリンを寝かせようとして服を脱がせた時に、突然怒ったよう

に金切り声を立てられました。最初はその理由が分かりませんでした。でも、後で気が付いたのですが、キャサリンが自分でやるのを待たずに、さっさと靴下を脱がせてしまっていたのです。それで、もう一度はかせ直して、自分で脱がせるようにすると、キャサリンはようやく機嫌を直したのです。驚くべきことですが、人間はこのように幼い内から、自分にもできるのだという気持ちを持ちたいと思うものなのです。

何事につけ過保護な親というものは、子供に良かれと思ってそれをするのですが、面倒な思いや不自由な思いをさせたくないというその気持ちは無用の老婆心であり、正しい動機とは言えません。それどころか、利己的な動機に発していることさえよくあります。自分が献身的な素晴らしい母親であることを見せて、人にほめられたいと思っているような女性はいないでしょうか。無意識的に、後々子供に見捨てられることがないようにと、自分は子供にとって不可欠な存在だと思い込ませようとしている父親はいないでしょうか。理由がどうあれ、考えられる結末は同じです。そのような行ないは、依頼心、自己不信、積極性や独創性、そして自尊心の欠如をもたらします。

このようにして両親が、子供に自分でできることをさせないでいると、依頼心がやがて誤った安心感となり、子供は自分が黙っていても親がしてくれることを当然の権利として要求するようになります。そして子供を損ねてしまう結果になるのです。

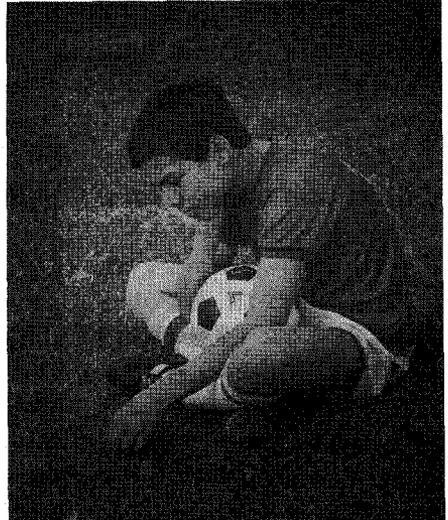
5. 子供が自分は価値ある存在だという気持ちを高められるようにして下さい。あ

る人が次のような思い出話をしてくれました。彼がまだ小さな頃、配線工事のため、ひとりの電気工が彼の家にやって来ました。縁の下に配線しなければならなかったのですが、狭い所で、大人が入り込むのはとても無理でした。それでその電気工は、小さな彼に、中へ入って電線を通してもらえないかと頼みました。彼は言われた通りのことをすると、25セント硬貨をもらいました。そして母親の所へ言って誇らしげにそれを見せました。すると母親がこう言ったそうです。「25セントももらったの。多過ぎますよ。おじさんのところに行って、10セントで十分ですって言ってきなさい。」

母親とすれば電気工の人に悪いと思っただけなのでしょうが、子供が30年経ってもそのことを覚えていたという事実は、見過ごしにできないとても大切なことではないでしょうか。

「25セントというのは大変なお金よ。おじさんはきっと、あなたがとっても良い仕事をしてくれたと認めてくれたのね」と言った方が、ずっと良かったのではないのでしょうか。また、人のために働くことを教え、進んで人を助けた時の良い気持ちを理解させる機会にできたかも知れません。そのようにしていれば、子供の自尊心に傷を与えるようなこともなく、良い結果を得られたことでしょう。

6. 子供たちと過ごす充実した時間を取って下さい。理想的には、父親と母親が別別に、一人一人の子供と一対一で過ごす時間を毎日取るようにすることです。子供の数が多し家庭にとって非常に難しいことで



あるのは分かりますが、その労は十分に報われます。様々な用事でとても忙しく、家を留守にし勝ちな親の中には、高価な素晴らしい贈り物でその償いをしようとする人がよくいます。しかし、親が与えることのできる最も素晴らしい贈り物は自分自身なのです。

キャンプ、釣り、買い物、スポーツの観戦、洗車、庭の草取り、また、ただ座って話をするだけのことで、大切な意志の疎通の機会とすることができます。親が自分のために時間を取ってくれる時、子供は、「父さんと母さんはほくと一緒にいるのが楽しいんだ。ほくのこと好きなんだな」という気持ちになれます。これによって自尊心を強めることができるのです。

7. 訓練のための時間を取って下さい。私たち大人は時として、自分たちには理解できる簡単なことでも、子供たちには手の

付けようのない大変な仕事になることがあるということを忘れてしまう場合があります。女の子に「自分の部屋をきれいにしなさい」と言いつけて、もしそれを言いつけた時間内にできないようなら、不従順で怠け者だなどと考えている母親がいるかも知れません。しかし、子供にすれぽどこから手を付けていいのか分からないということもあるのです。また、過去の実験から推し量って、どんなに一生懸命にやっても、母親は満足してくれないと考えているかも知れません。親として大切なことは、子供たちが自分にもできるのだという気持ちもてるように、訓練をすることです。自分ひとりで自信を持ってできるようになるまで、何回かは一緒にしてあげることが必要かも知れません。言われた仕事を自分でこなせるという気持ちは自尊心を強めてくれます。

8. 子供に、他の人の長所を見つけ、それをほめるように教えて下さい。15歳のキャロルは、他の人の良い点をほめるということを全然知らないようです。彼女に言わせると、教師は「無能」、隣の家の子供たちは「魔女」で、両親は「私の言うことを何も聞いてくれない」し、「何も理解していない」と言うのです。彼女は話の中で「ばか」「まぬけ」「つまらない人」といった言葉をよく使います。こうした否定的な態度があるため、ほかの子供たちは彼女に寄り付こうとせず、友達もひとりもいません。

キャロルは自分をどう思っているのでしょうか。他の人や周囲の世界に対する否定的な考え方は、彼女が自分自身に対して抱いている貧しい自己観の反映なのかも知れ

ません。また、彼女はその言葉遣いやものの考え方の貧しさゆえに批判や拒絶を受け、前から持っていた劣等感をさらに募らせているのです。

9. 子供たちに、自分の長所を見つけ、力の足りないところをくよくよ考えることのないように教えて下さい。ドンDonの右腕は生まれつき不自由で、ほとんど使うことができませんでした。ですから、自分を哀れんだり、腕を使わないとできない活動に参加しなかつたりしても、何の不思議もなかったのです。しかし、彼は決してそれを障害とは考えませんでした。もし、だれかがその障害のことを言っても、彼は大まじめにこう言うでしょう。「障害って、何のこと。」Donはゴルフもすれば、野球、バスケットもやります。しかも人にひけを取りません。彼の右腕が気になるのは、普通は初対面の時だけです。1度彼を知ると、そんなことはまったく忘れてしまうのです。彼は高等学校で生徒会の役員をし、友達も大勢います。Donの両親も彼の障害のことで思い悩んだりすることはなく、Donが様々な事柄にうまく対処していくようにと期待しています。そして、彼は自分の能力を用いて両親の期待に応えることによって、自信と自尊心を得ているのです。

自信を持つということは非常に健全なことです。見せかけの謙遜さには何の力もありません。自分自身と自分がしていることを高く評価している子供は、確かな自尊心を持っているようです。

子供に自分の長所を見いだすように教えるには、それを模範で示のが一番です。

親が自分の間違いを認め、時には正直に「今度は父さんが間違ってた」と言えるようになったとしたら、それは素晴らしいことです。そのような率直さが、親自身の自尊心や、子供の親に対するイメージを低めることはありません。子供も、大人でも間違っていることがあるということを知っておく必要があります。何か失敗をしても、あまりそのことにこだわらないようにして下さい。そうすれば子供たちにも、自分の足りないところにあまり心を奪われないように教えることができます。同じように、「万事順調にいったし、私は自分のやり方が良かったと思ってる」と親が自分の行動を率直に認めるなら、子供たちも自分の努力を積極的に評価するようになり、自尊心を強めていくことでしょう。

10. 子供たちへの愛を、言葉と体で示して下さい。ある人にとっては、「愛してるよ」と言うのは、とても難しいことのようにです。夫婦同士の間でもそうですが、子供に対してもそうだという人がいます。そんなことはとても気恥ずかしくて言えないというのかも知れません。また、そんなことを言ったら、子供がどんな反応をするか、心配しているのかも知れません。

しかし、愛されていると感じることほど、自尊心を養う上で力になるものはほかにないのではないのでしょうか。私たちは往々にして、子供たちは自分が愛していることを知っているだろうと考え勝ちですが、優しく抱いてやったり、頬ほおにキスをしたり、「愛してるよ」と言ったりすることで、信じられないほどに、子供たちとの絆を強め、彼

らの自尊心を強めることができます。

人生への備えをさせるために子供たちの自尊心を養いたいと思うなら、自分は人々に愛される存在で、能力があるのだという気持ちを感じさせるようにしなければなりません。私たちが親として、以上10項目にわたる提案を真剣に、また一貫した態度で実践するなら、子供たちの行ないはさらに良くなり、確実に自尊心を強めていくことでしょう。

話し合いのために

この記事を読んでから、以下の点について考えてみるとよいでしょう。

1. しっかりとした自尊心を築く上で、自分是人々から愛される存在であり、力もあるのだという気持ちを持つことが非常に大切だとされているが、それはなぜだろうか。
2. 人と神との関係についての福音の教えは自尊心を養う上でどう役立つだろうか。
3. 自分の子供一人一人を考えてみて、何か自尊心の欠如を示しているようなところはないだろうか。この記事の中に、子供たちが自信を持てるように助ける上で、役に立つ提案が何かないだろうか。
4. あなた自身の自尊心はどうだろうか。自己評価をするとよい。この記事の中に、あなた自身の自分に対するイメージを高める上で役に立つ提案はないだろうか。



幕のあなたより

レイ・J・スネルソン

高校3年生のある時、私は祖父が自分に会いたがっているという気持ちを強く感じました。それで、学校が終わってから、ロッカーからノートを1冊取り出して、おじの家へ行きました。祖父は祖母が死んでからずっとおじの家で世話になっていました。

私が訪ねると、祖父はベッドから体を起こし、「レイ、お入り。お前の来るのを待っていたんだよ」と行って、迎え入れてくれました。

祖父は私に自分の家族の歴史を話したかったのです。私は祖父の話を書き留めることにしました。そして、なぜノートを持っ

てきたのか、その理由が分かりました。それから、祖父は4代前からの家族の歴史を一人一人の名前、重要な日付や場所、エピソードなどを交えながら話しました。話を終えると、祖父は私の肩に手を置き、静かにこう言いました。「レイ、私の話を書いたこのノートを大切にしまっておいておくれ。いつかこれが必要になる時が来る。その時が来たら、お前は私の声を聞いて、今こそその時だと思い、私のこの願いの理由が分かるようになるだろう。」

私は祖父の真剣な態度を見詰めながら、心に温かいものを感じました。私はなぜそれを書いて、しまっておくのか理由は分かりませんでした。祖父の言った通りにすると約束しました。祖父が死んだのは、その2週間後のことでした。

何年か経ち、私はミズーリ州にあるアメリカ空軍レーダー技術者養成校に籍置いて勉強していました。私の教官にノーマン・M・ヘールという人がいて、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員だということでした。その夜、ベッドに横たわった私の頭からは昼間の教官との話が離れませんでした。私はベッドを出て、服を着替え、教官室へ行きました。時刻は夜の12時を過ぎていました。教官室のドアをノックし、私は「モルモン教会のことで、お話をしたいのですが」と言いました。

ノーマン・ヘールとその同室者はかつて宣教師として同僚を組んで働いた経験を持っていました。ふたりはその夜、私のために話をする時間を取ってくれました。彼らの話が神殿、系図活動、死者のための身代わりの業に及んだ時、私の耳にひとつの音が聞こえてきました。それは祖父の声で、あの時託した神聖な責任を再び私に告げた

のです。胸の中に何か熱いものが広がり、私は自分が今聞いているのは真実の教えであるということが分かりました。私はその翌週から末日聖徒たちが集う教会に出席し、1954年の10月にバプテスマを受けました。

しかし両親は私のバプテスマを喜んでくれませんでした。父親は私にモルモン教会の教えを自分に話すことは一切しないとまで約束させる始末でした。

それから10年の歳月が経ちましたが、その間、私はある若い女性と知り合い、彼女に福音を教えて、改宗させ、アイダホ神殿で結婚しました。私たち夫婦はずっと教会に活発に集っていましたが、父親との約束は守り通し、教会のことはひと言も話せませんでした。

ある時、父がこう言ってきました。「お前は教会のことは一切口にしない積もりでいるんだろうね。」私たち夫婦にはその言葉の意味が分かりました。

そして、「いや、そんな積もりではないよ」と答えたのです。

すると父が、「それじゃ、聞きたいことがふたつほどあるんだが、答えてくれるかい」と言ってきました。

父の質問を聞くと、父なりに教会のことを真剣に考えていたことがよく分かりました。私はひと通り質問に答えると、父がもっと知りたがっていることは分かっていたが、それ以上のことは話しませんでした。

すると、父がもどかしそうに言いました。「ほかにもっと話すことはないのか。」

私は「そんなことはないですけど」と言ってから、だいふ間を置いて、また話し始めました。「父さんも福音のことを大部考えていたみたいですね。いつも近くにいる私が教会のことを教えるのは何ですから、良

かったら、教会のふたりの青年を紹介しますよ。彼らなら父さんの質問によく答えてくれるし、福音についても教えてくれますよ。」

「レイ、その素晴らしいふたりの若者とやらについては、私も聞いている。1分間こっちの質問に答えると、次の1分でバプテスマへ持っていくということもだ。」

「分かりました。それじゃあ、彼らに約束させますよ。彼らは教会のことを教えるだけで、もし父さんにバプテスマを受けさせようという素振りを少しでも見せたら、出て行ってもらうようにします。もし、邪魔でなかったら、私も一緒にその話し合いに出て、彼らに約束を守るようにさせてもいいですよ。」

すると父が「分かった。でも私にバプテスマをどうのこうのと言ったら、すぐに家から出て行ってもらう」と言ったので、私は必ずそうすると約束しました。

次の火曜日の夜、私は両親と一緒に、宣教師のレッスンを聞きました。父の口から宣教師の話はみなもつともなことで、信じられると聞かされた時は、喜ぶと共に、ちょっと驚きもしました。父と母は2度目のレッスンも受けましたが、そのレッスンがすんだ時宣教師たちが、しないと約束していたことをしたのです。しかし、それはみたまが彼らにささやいたからでした。宣教師たちは父にバプテスマをチャレンジしました。そして私が何も言わない内に、父が「受けます」と答えたのです。母の答えも同じでした。それから、次の週の約束の時間が決められました。

その約束の日の日曜日、私の弟から電話がありました。弟は涙で声を詰まらせながらこう言いました。「兄さん……。父さんが

死んだよ……交通事故で……」私は泣きました。良き友であり、相談相手の父が突然死んでしまったのです。

それから1年後、私たちは神殿へ行き、父の身代わりの儀式を受けました。父の身代わりとして儀式を受けている間、自分は父が望んでいることをしているのだという良い思いを常に感じていました。

結び固めの部屋で、父と祖父母の結び固めの儀式を受ける時、私は聖壇の所にひざまずきながら、心に熱いものを感じました。父が霊の体でそこにいるのが分かったのです。神殿長の顔を見ると、彼の目にも涙が光っていました。そして私にこう言いました。「ネルソン兄弟、あなたのお父さんについて話していただけませんか。」私は父を愛し、とても親しく思っていたことを話し始めました。ところが神殿長が私の言葉をさえぎって、「いや、そういうことではなくて……あなたのお父さんの外見ですよ」と言うのです。それで私は父親の顔かたちを説明しました。そうすると、神殿長の顔に優しいほほえみが浮かびました。

その結び固めの儀式を終えた後で、神殿長は私ひとりを残して、ほかの人に少しの間、部屋を出てくれるようにと頼みました。彼は私の手を取り、その部屋の傍らへ連れて行き、隣合って座らせました。その時私たちの目には涙があふれ、その部屋は熱い思いが一杯にあふれているかのようでした。神殿長が尋ねてきました。「お気付きでしたか。」私は「はい」と静かに答えました。

神殿長が言葉を続けました。「あなたのお父さんが、あなたのちょうど後ろの所に立っていらっしやいましたよ。」

私の目にはもう一度、喜びの涙があふれ出てきました。

私の時間

エロイズ・ベル

集 会が終わっても、ワード部の会員たちはまだ教会にいて話をしたがっているようでした。特に大人たちは、キティーの所へ入れ替わり立ち替わりやって来て、新しい責任が与えられたことに祝福の言葉を言っていました。でもキティーは、できるだけ早くその場を逃げ出したい思いでした。

そして、母親を待たずに、教会員に会うことがないようにと、教会の裏口からそっと抜け出しました。

家に着いて、キティーは父親に気付かれないように、2階の自分の部屋へ上がろうとしましたが、日曜版の新聞を持った父親が小さな部屋からぬっと現われました。キティーと父親はその部屋を「隠れ家」と呼んでいました。ホームティーチャーや監督、それにほかにも教会員たちが来た時に、父はよくその部屋に姿を隠したのです。実際キティーは、父は出入りする教会員たちをうまくかわすなと思ったことが何度もあります。特に宣教師に対してはそうでした。それだけになおさら、その日は感情が爆発する前に、父親の前から姿を消したかったのです。

「キティー、きょうはどうだった。母さんから聞いたけど、クイーンビーとか何とかなったんだってね。」

「何言ってるのよ、それを言うならクイーンハイブのクラス会長よ。クイーンビーなんかじゃないの。何も分かっちゃいないんだから。どうでもいいけど、私そのことでは何も話したくないの。」

部屋に入ると、キティーはベッドの上に身を投げ出しました。熱い涙が込み上げてきました。ところがすぐに、庭の方から何か聞き慣れた声が響いてきました。

「キティーいるの。ねえ、キティーつたら。」

窓からのぞくと案の定、いとこのタミーでした。玄関の所のブランコに乗って、大声で叫んでいます。

「タミーきょうは遊べないのよ。分かった？きょうはだめよ。」でもタミーは、大きな手でブランコの綱をしっかりとつかみ、ずんぐりした足で楽しそうにブランコを前後ろへとこぎながら、キティーを呼び続けました。怒ったキティーは音をたてて階段を降りていき、玄関のドアを勢いよく開けました。

「タミー、だめだって言ったでしょ。帰んなさい。家へ帰るのよ。」涙をポロポロこぼしながら、キティーは庭へ降りていきました。そして、振り向くと、何が何だか分からないという顔をしたタミーが、涙ににじんで見えました。家の中へ戻るよりも、

そこから逃げ出したい気持ちで一杯でした。すると、父親が出てきて、タミーの肩に手を回し、何かそっと話しかけ、家へ帰らせました。キティーは向きを変えて、納屋の方へ駆けていきました。

それは外から見ると納屋のようですが、中へ入るとそんな感じは全然しません。キティーの母親はその片側の方を、素晴らしい天窓を付けたアトリエにし、西側の壁には絵を飾っていました。どれもとても手放す気にはなれない作品でした。そして父親もこの建物の中に、杉の削りくずや、ニス臭の臭いがする、こぎれいな作業場を構えていました。でも、キティーにとっては何と云っても、自分の屋根裏部屋が最高でした。そんな素晴らしい部屋を自分の物にしている人はだれもいないと思っていました。小さい頃はこの部屋でままごと遊びをしたり、おとぎ話を読んだりしました。日記を書いたり、一番の友達と秘密の話をするのもその部屋でした。また、自分ひとりになって、羽を伸ばす時もありました。

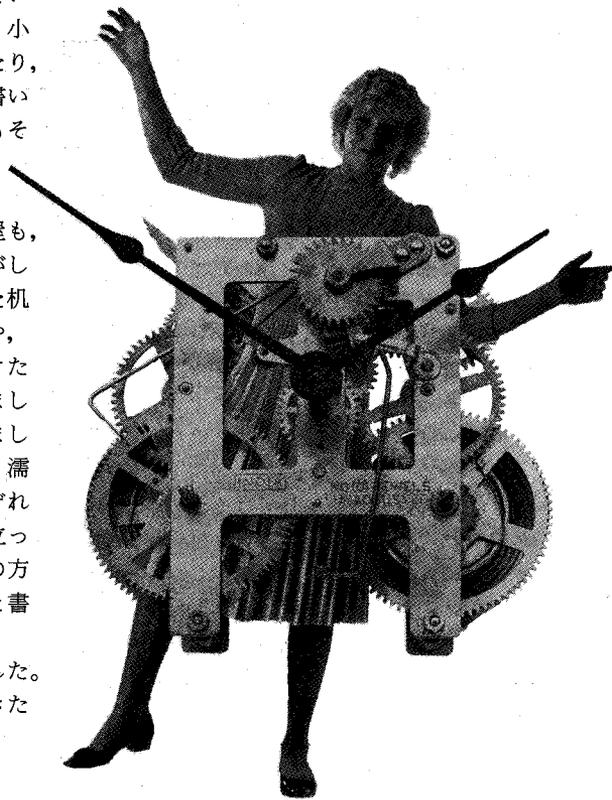
でも、きょうばかりはその屋根裏部屋も、自分を歓迎してくれていないような気がしました。父親が表面を削り直してくれた机を見ると、長い間書かないでいた日記や、1日で読もうと固い決心をした古ぼけた「ドン・キホーテ」の本が置いてありました。壁に寄って、額に入った写真を見ました。そこには4人のやせこけた少女が、濡れたほつれ髪を首にかからせて、それぞれにトロフィーを手にし、プールの側に立っている姿が写っていました。写真の下の方には、インクで「かえるの子初勝利」と書かれていました。

その時、だれかが納屋に入ってきました。大きな音をたてて、いかにも、入ってきた

ぞと言っているように聞こえました。それから、ほうきの柄でその部屋へと通じるはしごを遠慮がちに叩く音がしました。キティーの父親は、娘の許しがなければ、決してそこには入りませんでした。

「キティー、父さんだけど、上がっていてもいいかな。」

「このことは私ひとりで考えたいの。ごめんなさい……、ひとりになりたいのよ。」そしてキティーは口をつぐみました。妹のジェニーが母親に何でも相談していたように、キティーはいつもいろいろなことについて父親と話をしていました。でも、この日のことだけは話すわけにはいかなかったのです。



父親の声がキティーの耳に飛び込んできました。

「キティー聞いているかい。父さんの声が聞こえるか。」

「聞こえてるわ。」

「よし。おまえの部屋に無理に入り込むようなことはしたくないけど、とにかく話をしたいんだ。上がっていてもいいだろう。」

「お父さんに話せることじゃないのよ。話しても分からないことなのよ。」

「それじゃ、分からせてくれ。上がってもいいね。」

キティーは、自分が答えなければ、父親は夜になるまでもそこにいて、同じことを言い続けることを知っていました。それで扉を開けて、こう言いました。「どうぞ。でもお父さんに話したって解決できるかどうか分からないわ。」そして小さなソファに腰をおろしました。

「それは私にも分からないのよ。」父親もそう言うと、今にも壊れそうな古い揺り椅子に座り、腕を組んで、ため息をつきました。

しばらくの間、ふたりとも何もしゃべりませんでした。キティーは、父親とふたりきりで何も話さず、そうしている時の雰囲気がとても好きでした。こんな素敵な沈黙があることはほかのだれも知らないだろうと思っていました。そして、結婚相手は、こういう沈黙の素晴らしさを共に分かち合える人にしようと心に決めていました。

父親の方が口を開きました。

「教会のことじゃないのかい。」

キティーはためらいの色を見せて、「いや、教会には直接関係ないことなんだけど……」と言葉を濁しました。

「はっきり言いなさい。教会のことなんだろう。」

「そうよ。」

「信仰のない父さんに、教会のことで悪いことは言いたくない、だから黙ってるんだろう、そうじゃないのか。」

「お父さん、前にも言ったけど、だれもお父さんのこと無神論者だなんて思っていないわよ。」

「本当かね。」

「本当よ。」父親は口元にかすかに笑みを浮かべながら、少し椅子を揺すりました。

「キティー、私は母さんと結婚してからもう16年、お前とは13年、ジェニーとは11年の付き合いだ。監督を2回も務めているお前のおじさんのケンとは兄弟として仲良くやってきている。お前たちの教会が人々のためにしている素晴らしいことを、父さんが知らないとも思ってるのかい。人間は完全じゃない。だからどんな時だって問題はあつた。父さんだつてそのくらいのことは知っている積もりだよ。」

ふたりの間にまた沈黙がありました。でもキティーにとって気詰まりな沈黙でした。今度は自分が口を開かなければならない番だったからです。

「私にはできないのよ。そんなに何もかもやれつて言われても無理なのよ。」キティーの声は、自分でも驚くほど大きい声でした。「お父さん、私は13歳よ。勉強もしつかりやって、学校のオーケストラに残れるようにチェロの練習もして、それに、水泳のチームにも残つて、時間を取つてタミーが障害者のオリンピックに出られるように助けてあげて。その上、菜園で働いて、日記を付けるのよ。そうするように期待されているからよ。でも誤解しないで欲しいけど、

私はそういったことがみんな好きよ。外国語を勉強しなさいと言われたから、今年はスペイン語の勉強も始めたわ。それから出るべき集会には必ず出るように、困ってる人を助けるように、ワード部のすべての活動に参加するように、家族同士しっかり結び合うようにといろいろ言われてきたわ。その上きょうはピーハイブのクラス会長の責任、これでまた出なくちゃならない集会が増えたのよ。

お父さん、私、言われたことはみんなしたわ。実際やってる積もり。言われてみれば全部正しいことだし、間違ったことじゃないわ。でも、私は13歳よ。自分の時間を全部そういうことに使い切るなんてできないわ。まだ子供よ。それに、そういう荷物が増えてくるから、今に学校の方も大変になってくるわ。高校出たら大学、大学を出たら仕事、そして結婚、子供の世話。私がおばあちゃんになるまで続くのよ、こういうことが。神殿で揺り椅子に座ってるおばあちゃんたちみたいになるまで。」キティーはそこまで言うと、ソファのクッションに顔を埋めるように、身を投げ出しました。

「責任をよく果たせば果たすほど、大きな責任を与えられるんだね。そういうことだろう。」

キティーはクッションに顔を埋めたまま何か言いましたが、父親の耳には聞き取れませんでした。

「それで急いですればするほど、遅れてくるというわけだ。」

キティーがまたクッションの中から、うなるような声で何か言いました。

「お前としては、何でもきちんとやりたいけど、何ひとつ自分が望むような完全な結果が出てこないように思えるんだろう。」

キティーは顔を向け直し、父親をじっと見詰めました。

キティーの父親は前に何度か、自分はおのヘンリー・デビッド・ソーロー*に似たところがあって、窮屈な生活には耐えられないと言ったことがありました。彼は仕事は一生懸命して、家や庭の手入れも良くしました。でも、そこから先に進んで、何かの組織に加わるというようなことはしませんでした。妻や娘たちがしている多くの事柄には、手を出そうとしませんでした。キティーには、そんな父親がどうして自分の思っていることを言い当てることができたのか不思議でなりませんでした。

また、沈黙の時間が過ぎていきました。そして、キティーがこう言ったのです。「お母さんは、責任のこと一体どうしてるのかしら。」

「そうだよキティー、この問題の解決法は母さんに聞かなくちゃ。母さんなら答えてくれるよ……」

「でも、お父さん。お母さんは確かに何でもやってるわ。みんなもいつもお母さんのことほめるわ。『あなたのお母さんは、どんな風にしてそれをやるの。あなたのお母さんのやり方教えて』って。」キティーは自分にそう聞いてきた人たちの声色を使って話しました。「私はお母さんみたいにきちんとしてきそうにもないし、とてもあんなにはなれないわ。そうしようとも思わない。いつもみんなに聞かれるけど、私は知らないのよ。お母さんがどうやってるのか何も知らないのよ。」

「母さんに聞いたことはあるのかい。」

「でも答えは分かっているわ。『ベストを尽くしなさい』とか『予定を立てるのよ』とか何とか言うだけよ。きっとそんなことお

母さんには簡単なことなのよ。」

「もしそうだとしたら、どうして私がお前の心の中の考えや、さっき言ったようなことをすべて知っていると思うんだい。」

「それじゃあ、教えてよ。どういう風にやったらいいの。」キティーはソファの上に座り直して、腕組みをしました。「お母さんは全部やってるわ。どうしたらそうできるのか教えて。」

「なるほど、お母さんは全部やってるのか。全部ね。」突然父親は揺り椅子から立ち上がり、屋根裏部屋からはしごを降りてきました。そうしている内に今度は作業場とアトリエの間の物置き部屋から、何かを捜す音が聞こえてきました。

「お父さん、何やってるの。どうしたっていうのよ。」

「ちょっと待ってなさい。確かこのへんにあったんだが……」と低い声の返事が帰

ってきました。それから、トランクのふたを開け閉めしたかと思うと、手に何かを持ってはしごを駆け上がってきました。

「こっちの明るい方へ来てごらん。」キティーも窓際の方へ寄りました。「これを覚えてるかい。」

それは白い布地のようなものでした。キティーが手に取ってみると、小さなレースのドレスでした。たくさんのひだや縁どりがある真白なドレスで、腰のところには青と赤の模様が付いていました。とてもきれいな物で、それが自分の物であったことをキティーは覚えていました。

父親が優しい声で言いました。「お前はまるで天使のようだったよ。あの頃は髪がブロードだったね。この服を着て、白の靴と靴下をはいて、確か、赤と青のストライプ

途 中でやめなくちゃならないこともあるだろうし、続けていくこともあるだろう。妥協しなくちゃならないこともある。時には、ひとつのことから別のことへ移っていくこともある。でもそれは、お前が自分は何を学ぶべきかを理解できようになったからだし、自分が与えるべき最も大切なものを与えられてきたからなんだ。



だったな、服の模様にぴったりなんだ。プライマリーの復活祭の発表の時だったよ。お前は一番前の所に真直ぐに立って、ひと言も間違えないで歌ったんだよ。たった3歳の時にだよ。父さんは後ろの方に座っていたんだが、お前が『神の子です』と歌った時には涙が出てきて、きまり悪くてしょうがなかった。でも両隣を見たら、やっぱり男の人が泣いたり、鼻をすすりあげたりしてるんだ。母さんはお前と、その服にとでも満足そうな様子だった。確か、母さんはフィルム1本分、お前の姿を写真に撮っていたよ。今でもどこかにあるはずだよ。」キティーはそのドレスをもっと近づけて見ました。母が丹精込めた一針一針の縫い目が見えました。

「これ、お母さんが作ってくれたの。」父親がうなずきました。「でも、お母さん、今は全然裁縫しないわね。」

「そうだね。母さんも、何もかも全部をしたわけじゃない。家族のために縫い物をするのが好きだったけど、でも、ある時とうとう言ったよ。縫い物をしてると時間がかかって、ほかのことができないってね。」父親はキティーの手からそのドレスを取って、丁寧にたたみ始めました。

「でも、お母さん、絵はやめなかったでしょう。」

「そりゃそうさ。絵は母さんの息抜きだからね。母さんにとって絵は泉のようなものさ。のどの渇きをいやすために人が寄ってくる泉のようなものだったんだよ。母さんも満たされる必要があったんだ。でなければ、人に与えるものなんか何もなくなってしまうよ。母さんにとっては、それが絵なんだよ。それともうひとつが、この聖典かな。今まで母さんが土曜の夜に教会のこ

とで人と約束をしたことがあるかい。」

キティーは大分考えていましたが、やがて首を横に振りました。

「ないだろう。土曜の夜は家族だけの時間だったんだ。映画に行ったり、食事に行ったり、ドライブや散歩をしたり。母さんに連れられて美術館に行くこともあるけど、父さんも時々、母さんのことホッケーの試合に連れていく。土曜の夜は家族の時間とはっきり決めてあるんだ。」

「私はまだ結婚してないけど、自分ひとりの時間を取ってもいいの。」

「いいとも。そうできるようにならなくちゃいけないんだ。土曜の午後は、だれが来たって、断わればいいのさ。何も考えないで、ここで横になってるのもいい。雨の中を自転車で走るのもいい。とにかく、自分は13歳なんだと感じられるようなことをして土曜の午後を過ごすことさ。絶対にだよ。ついでにもうひとつ、おまけをしよう。土曜日は畑仕事はしなくてもいいからね。」

「今初めて思ったんだけど、お母さんも裁縫のほか、途中でやめたものがたくさんあるのかしら。どうなの。」そして、キティーはまた白いドレスの赤と青の模様を目をやりました。

「もちろんさ。でもやり続けたこともたくさんあるよ。さつきも言ったけど、絵は絶対にやめなかった。だからお前も、チェロの勉強をやめようなんて考える必要は全然ないんだよ、いいね。」

キティーは不思議に思いました。水泳、コーラス、読書、それにいろいろなことをしてきたけど、チェロが自分にとって特別なものであることを父が知っているのはなぜだろうか。

「いいかい、キティー。お前はこれから

の人生でもいろいろなことを求められていくけど、それはお前にいい頭と才能があって、人のために働こうという気持ちを持つてるからなんだよ。でも、どこまで人に与えて、どこまでを自分のものとして残すかを、知恵を使って決めなくちゃならない時があるんだ。例えば、いとこのタミーのことを考えてみようか。お前はタミーのために随分と尽くしてきたね。彼女の親にできないようなこともしてきた。でも、お前はそのためにかくさんの時間を使ってる。タミーも何でもひとりですることができるまでは、愛し、助けてくれる人が必要だ。では、この問題を解決するためにはどうしたらいいと思う。知恵を使って考えてごらん。」

キティーは立ち上がって窓の所へ行きました。道路沿いにタミーの家が見えました。キティーはタミーがテーブルに皿を乗せる手伝いをしている姿を想像しました。それから自分が何時間もかけて助けてあげた後で、タミーが何とか自分の力でやり遂げた時の誇らしげな顔を思い出しました。キティーにはタミーを見捨てることなどとてもできませんでした。

「そうだ、ジェニーよ。ジェニーはもう大きくなっているんだし、タミーとも仲良しだわ。タミーの世話をするようになれば、テレビを見る時間だってずっと少なくなるし、ジェニーのためにもいいことよ。必要なことは私が教えてあげればいいんだし……」

「それはいい、ジェニーにもできると思うよ。お前が新しい指導者の責任を受ける力があるようにね。」

「ビーハイブのクラスのこと言ってるの。」

「そうさ、今まではタミーが相手だったけど、今度は同じ年頃の女の子が相手だ。」

まったく違った責任だよ。でも、きっとできるよ。母さんと話し合った方がいいと思うな。時間の取り方についていろいろ参考になる意見を出してくれると思うよ。でも、時間の問題はそう簡単に考えちゃいけないよ。母さんにとっても、お前にとっても、決して易しい問題じゃないはずだ。途中でやめなくちゃならないこともあるだろうし、続けていくこともあるだろう。妥協しなくちゃならないこともある。時には、ひとつのことから別のことへ移っていくこともある。でもそれは、お前が自分は何を学ぶべきかを理解できるようになったからだし、自分が与えるべき最も大切なものを与えられてきたからなんだ。タミーのこのようにね。」

突然、母親の呼ぶ声が聞こえてきました。

「あなた、キティー、どこにいるの。食事の準備ができたわよ。」

「行こう、キティー。母さんを待たせちゃ悪いからね。」

「そうね。父さん、本当はね、夕食の後で、母さんと話をすることになってるの。時間もたっぷり取ってあるわ。あっ、忘れるとこだった……」キティーは窓際の椅子に駆け寄り、きれいにたたんだ小さな白いドレスを取りました。

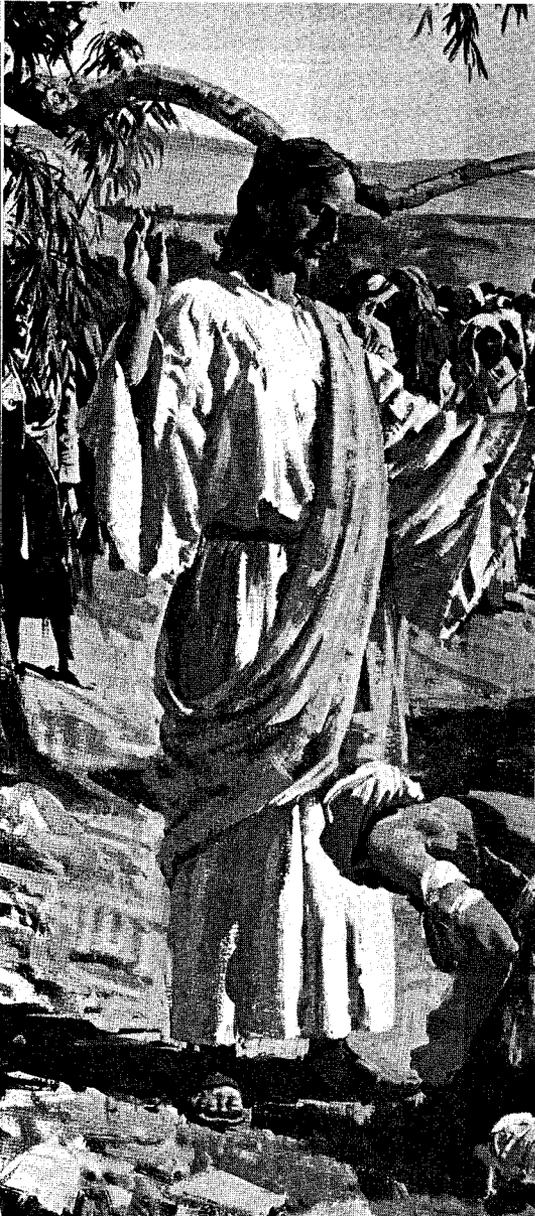
「これ、しばらく私が預っておくわ。」そしてキティーは「神の子です」の節に合わせて口笛を吹きながら、父親の後を付いていきました。

*ヘンリー・デビッド・ソーロー

(1817-1862 アメリカの思想家、博物学者、著作家)

奉仕の召し

ジョン・A・トベトネス



以下の人々の名前を当てて下さい。

1. 私は牛を使って畑を耕していた時に、
予言者の召しを受けました。
2. 私は父親の家畜を捜している時に、王
として召されました。
3. 夜寝ている時に、ある声に起こされ、
予言者としての召しを受けました。
4. 私たちはアンテオケの長老や予言者た
ちの断食と祈りによって、宣教師とし
て召されました。
5. 私は羊を飼っている時に、王として召
されました。
6. 私は祈るために森の中へ行き、そこで
予言者としての召しを受けました。
7. 私は生まれて8日目に予言者として召
されました。
8. 私は麦の脱穀をしていた時に、
天使を通して召しを受けまし
た。
9. 私はイスカリオテのユダに替
わる者として召されました。
10. 私は末日聖徒イエス・キリスト教会の
第12代目の大管長として召されました。

解答：

1. エリシヤ(列王上19:16-21)
2. サウル(サムエル上9:1-10, 17)
3. サムエル(サムエル上3:1-21)
4. パテロとバルナバ(使徒13:1-3)
5. ズビデ(サマエル上16:10-13)
6. シモーン・ペテロス(シモーン・ペテロス2:12-20; 教義と聖約107:45)
7. パテラス・ヨハネ(教義と聖約84:27-28)
8. キアロン(士師6:11-14)
9. ヌツヤ(使徒1:20-26)
10. アサ・W・キボーン



キリストと創造

十二使徒定員会会員
ブルース・R・マッコンキー

●キリストと創造

主は私たちに、地球や人間を初めとする万物の創造に関して、真の教義を信じ、理解するよう望んでおられる。事実、後に分かることだが、創造の教義を理解せずに、救いを得ることはできない。万物の創造に関して正しい知識を得なければ、神から完^{とつた}き報いが与えられると望むことはできない。他の方法でその報いを得ることはできないのである。

神は私たちすべての者の御父であり、霊の子らが進歩し、御自身のような者となれるように、救いの計画を立てられた。それが神の福音であり、人に救いを得させる永遠の御父の計画である。その計画は3つの要素からなっている。その3つとは、創造、墮落、贖い、であり、永遠の原則の柱石をなすものである。

私たちは万物の物質的な創造について理解しようとする前に、創造、墮落、贖いというこの3つの永遠の真理が、どのようにしてひとつに織り合わされているかを知っておく必要がある。この3つの内、独立して立ち得るものはひとつもない。それぞれが他のふたつと結び付いているのである。3つすべてを理解するのでなければ、一つ一つに対する真の理解を得ることもできない。

救いはキリストの中にあり、キリストの贖いの犠牲によってもたらされる。主イエス・キリストの贖いは、啓示された神の教えの中心をなすものである。キリストの贖いは、アダムの墮落によってこの世にもたらされた肉体と霊の死から、人を解放して

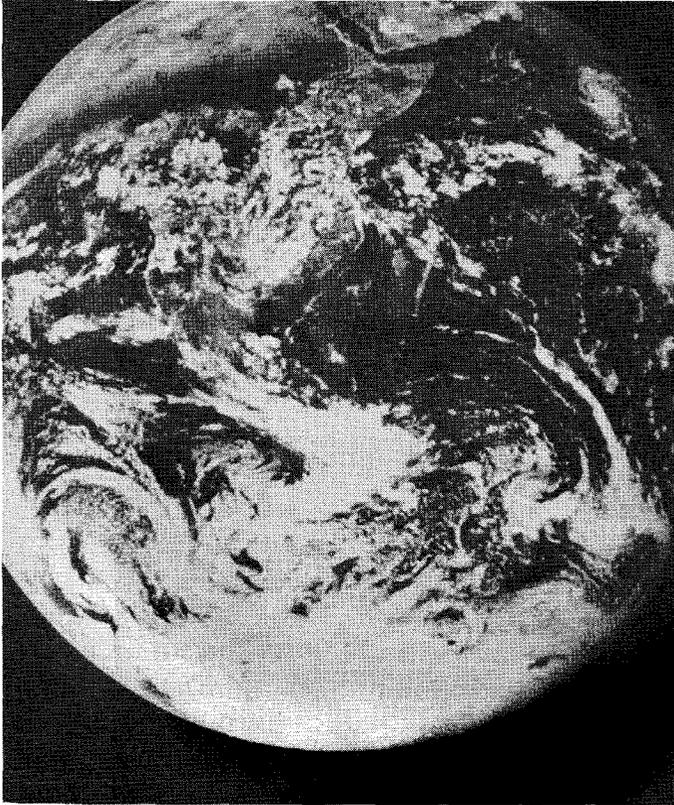
くれる。尊き主が死からよみがえり、眠れる者の最初の実となられた。それによって、全人類が復活できるようになったのである。

また、キリストが死なれたのは、罪を犯した人間を救うためでもあった。キリストは悔い改めを条件として、すべての人の罪を負われたのである。人が神の賜の内最大のものである永遠の生命を得ることができるのは、キリストがゲツセマネとゴルゴタでなされた贖いの業によるのである。キリストはまさに、よみがえりであり、命である。不死不滅と永遠の生命もまた、この贖いを通して得られるようになった。大いなる贖い主が持つておられる贖いの力の栄光、驚異、永遠の意味は、いかなる言葉、表現力をもってしても表わすことはできない。

しかし私たちは、墮落があったからこそ贖いをもたらされたということを忘れてはならない。墮落がなければ、不死不滅と永遠の生命をもたらす贖いもなかったのである。このように、確かに救いが贖いのゆえにもたらされたように、救いは墮落のゆえにもたらされたのである。

死すべき性質、繁殖、死はすべて、墮落をその出発点としている。現世における試しは、人類の最初の両親がエデンの園の家を追われた時に始まった。エノクはこう言っている。「アダム墮ちたるが故にわれら今ここに在り。またアダムの墮ちたるによりて死は来れり。この故にわれら不幸と禍^{わざわい}とを味わう者とせられたり。」(モーセ6:

創造に対する私たちの知識は限られたものである。私たちは万物の創造がいつ、どのようにして、どのような目的で行なわれたかを知らない。



48) 人類最初の母親イヴは非常に深遠な教義を次のように語っている。「もしわれら罪を犯さざりせば、われら子孫を得ざりしならん。また善悪の区別も知らず、われらの贖われる喜びも知らず、すべて従順なる者

に神の賜わる永遠の生命も知らざりしならん」。(モーセ 5 : 11)

墮落があったのは、永遠の創造主が、地球、人間、すべての命あるものを、墮落し得る存在として造られたからであることも

●キリストと創造

忘れてはならない。この墮落によって、すべての事物の状態が変化した。万物は墮落し、変化し得るように創造されていたのである。このようにして現出した現世の状態は、御父の永遠の救いの計画に属ける全条件が効力を発する上で不可欠のものであった。

最初の物質的な創造は、その本質において、不朽性を備えていた。エデンの園の時代の生命体はすべて、墮落後の存在とは異なる次元の高いものであった。来るべき墮落はあらゆる存在を低い次元に落とすものであったが、それは同時に、進歩への道を備えるものであった。死と繁殖はまだこの世に入っていなかった。死がアダムから人類への贈り物となり、永遠の生命が神の賜としてイエス・キリストを通して与えられることになっていた。

このように、現世の状態は神が与えて下さったのであり、アダムによって死がもたらされ、キリストを通して不死不滅と永遠の生命がもたらされることになったのである。リーハイは説得力のある適格な表現で、全人類は墮落のゆえに、「試しの生涯」にあると言っている。また、「もしもアダムが罪を犯さなかったならば、彼は墮落をせずにそのままエデンの園にいたであろう。」当時のアダムは肉体的に不死の状態にあった。つまり、まだ死が入っていなかったために、そのまま永遠に生きることもあり得たのである。「また、アダムとイヴは子供をもうけることもなかったであろう」。彼らは試しの生涯と肉体の死を経験する機会を与えられ

なかったかも知れない。しかし、この世の試しを受けなければ、永遠の生命を受けることはできないのである。父なる神に感謝しようではないか。——「アダムが墮落したのは人類を生ずるためであり、人類が現世に在るのは幸福を得んためである。そして時が満ちると、人間の始祖の墮落の結果から人間を贖うためにメシヤが来りたもう。」(II ニーファイ 2 : 21-26)

私たちは救いの計画に関して、これらの事柄を認識することによって、地球や人類を初めとするあらゆる生命体の創造を考察することができる。創造によって墮落が生じ、墮落によって贖いが来、贖いによって救いがもたらされる。このことを理解しておくなら、創造に関して神から与えられた知識を、全体的に正しく把握することができる。

創造に対する私たちの知識は限られたものである。私たちは万物の創造がいつ、どのような目的で行なわれたかを知らない。もし創造に関するすべてのことが輝かしい完全な形で、余すところなく啓示されたとしても、私たちの限りある頭脳では理解できないであろう。墮落と贖いを正しく理解し、救いを受け継ぐ者となるためには、これまでに啓示されてきた主のみ言葉を信じ、理解しなければならない。

将来、主は今以上に、私たちに対して、創造について深く考えるように求められるであろう。末日の啓示にはこう書かれている。「主の来りたもうその日にはすべての事

を顕したまわん。すなわちすでに過ぎ去りしこと、また何人も知らざる隠れたること、この世の造られたる事物のこと、またこの世の目的、終りなど……」(教義と聖約 101:32-33) 福千年が来るまで、私たちはこれまでに知らされてきた創造に関する真理を信じ、受け入れなければならないのである。

キリストは無数の世界の創造主であり、贖い主である。人間にはその世界を数え尽くすことはできない。無限無窮の創造と贖いの業に関して、聖典には御父のみ言葉が次のように書かれている。「われは、無数の世界を創りたり。而して、またこれらはわれ自らの目的ありて造りしなり。而して、わが子によりてこれらの世界を創りたり。わが子とは、わが生みたる独子ひとりごのことなり。……されど、この世とこの世に住める人々の話のみを汝にして聞かす。」主が創造される地のすべての世界に関して私たちが知っているのは、贖い主を通して地のすべての人に「不死不滅と永遠の生命とをもたらす」のが、主の業にして、主の栄光であるということだけである。(モーセ 1:33, 35, 39)

おそらくこの神権時代に与えられた内で最も輝かしいと思われる示現の中で、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは「御父の右に御子」がおられるのを見、また、「御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼によりて先に造られ、また現に造られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なること

を証したもう。」(教義と聖約 76:20, 23-24) キリストは創造主であり、贖い主なのである。もろもろの世界はキリストによって造られ、その無限の贖いによって、この世の人々はキリスト御自身と共同の相続人として、神の家族に迎え入れられる。この示現を信ずることによって聖徒らは神の子供となることができる。予言者ジョセフ・スミスはこの示現を元に次のような文を書いている。

「また、天よりひとつの大いなる声ありて証するを聞く、

そは救い主にして神の独子なり、
諸天の広がり限りなしといえども、
諸々の世界は、彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて造られたり。

また、そこに住める者は、初めより終わりに至るまで、

我らが救い主によりて救われるなり。

また、彼らが神の生みたもう娘、息子となるは、

同じ真理、同じ力によりてなり。」

(*Millennial Star*, vol.4, pp.49-55; Cited in *Mormon Doctrine*, 2nd ed., Salt Lake City: Bookcraft, 1966, p.66)

滅びゆく人間には、創造と贖いの業の無限無窮の本質を理解することはできない。私たちは、主がこのような啓示を通して、その果てしないみ業に関する永遠の真理をかいま見させて下さったことに感謝している。私たちに関係があるのは、この地球である。永遠の生命を得ようと奮闘する私たちに道を示してくれるのは、この地球の創

●キリストと創造

アダムが墮落したことによって、腐朽性が持ち込まれ、子孫が殖えるようになり、死が入り込んできた。



造に関する真理なのである。

それでは、アブラハムと共に前世の「高貴にして偉大なるもの」の群れを見てみよう。「これらの者の中に、神の如き者」がひとり立っておられた。この御方がかの大いなるエホバ、御父の長子である。御子は「と

もに在りし者たち」、すなわち、ミカエルを初めとする雄々しき者たちに、「われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん」と仰せになった。(アブラハム 3 : 22, 24)

Christ and the Creation

よく見、聞き、考えるなら、私たちの理性は光を注がれ、理解は天にも達する。キリストは確かに、御父の霊の子らが住むべき家を創造されたのである。しかし、キリストはひとりでそれをなされたのではない。創造は組織的に、つまり、他の高貴にして偉大なる霊たちにも、それぞれになすべき分が与えられていたのである。また地球は既存の物質を用いて創造された。物質は永遠であり、創造とは組織することなのである。

創造の業の進行を見ていくと、神が十戒の中でモーセに語られたみ言葉が、実際その通りであることが分かる。「主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれた」。(出エジプト 20:11) では、その一日一日になされた創造のみ業を見てみよう。

まず最初に、聖典に言う1日とは何であろうか。それは時代、累代などとも呼ばれる、ある区切られた時であり、永遠の時の一部分である。また、確認できるふたつの出来事にはさまれた時と言うこともできる。創造の1日とは、長さがどれだけであるかに関係なく、その目標とするところを達成するために要した期間を言う。尺度のひとつとして用いられているのが、日の栄光の状態の天体が1回自転するのに要する時間である。例えばアブラハムは、「主の計算」によれば、1日は「一千年」に当たると言っている。これが「コロブの一廻転」であり、「主の時の計算」なのである。(アブラハム 3:4)

聖典の中には、創造に要した6日がいずれも同じ長さであったと述べている啓示はない。創造に関して私たちに知らされているのは、モーセの書とアブラハムの書、そして神殿の中で教えられている事柄である。この3つの教えはどれも予言者ジョセフ・スミスにさかのぼることができる。モーセとアブラハムの記録は両方共、天地創造にまつわる様々な出来事を、連続する時の流れの中の事柄として描いている。具体的には後に見ることにする。理由があつて神殿の教えでは、時の区分の仕方が異なっている。神殿の教えによく通じている人には、その理由は明らかである。明らかに「6日」という時は、ひとつの連続する時代であり、連続する創造の業を区切って考える必要性はないように思われる。

モーセの書と神殿の教えが述べているのは物質的な創造、つまり触知し得る物質の組織についてであり、霊的な創造ではない。アブラハムの書は創造の業の詳細な計画を提示してくれている。そこには創造を推し進めた神々の計画が記されている。6日間の出来事を記した後に、アブラハムはこう書いている。「天と地を造らんと神々同志にて議りたまひし時決めたるはかくの如し。」(アブラハム 5:3)

それに続けてアブラハムは、神々が初めの計画通りに実行したことを書いている。とすると、アブラハムの書は、実際の創造について記録したものであることになる。

第1日——エロヒム、エホバ、ミカエル、そして高貴にして偉大なる者たちは、皆各

●キリストと創造

自の分担を果たした。「神々」は空と地を造った。地は「形なくして空しく、また、人の救いという目的に役立てることのできる状態にはなかった。地は「空しくて荒れ果てたる所」で、まだその表に生命が存在し得る状態ではなく、神の子供たちが住む所としては不適当であった。大いなる「淵」の「水」が表われたが、「光あれ」との命令があるまで、暗黒が覆っていた。光と闇とが分けられ、光を「昼」と呼び、闇を「夜」と呼んだ。これは明らかに、地球が自転する天体として造られ、太陽の周りを巡る軌道上に置かれたことを示している。(モーセ2：1-5；アブラハム4：1-5参照)

第2日—この日、水は地表とそれを取り巻く空の間に分けられた。「大空」とも「広がり」とも呼ばれる「天」が造られ、「広がり」の下の水と、広がりの上の水とを分けた。この創造の過程が進むにつれ、雲、雨、嵐などによって、まだ地上に現われていなかった生命をもたらす準備もなされたことであろう。(モーセ2：6-8；アブラハム4：6-8参照)

第3日—この日に初めて生命が現われた。3日目に「天の下の水」が「一つ所に寄り集り」、「乾ける地」が現われたのである。乾いた地は「陸」、寄せ集められた水は「海」と呼ばれた。また、この日、神々は「地を組織して」、様々な草木をはえさせた。そして神々がまいた種から、あらゆる種類の植物が生じた。青草、種を生ずる草、樹木はそれぞれ「その種子より」生じ、「その種類に従って」実を結ぶようにとの言葉

があり、植物の王国の領域が、その様々な種類を造った神々の手によって定められたのである。(モーセ2：9-13；アブラハム4：7-13参照)

第4日—あらゆる種類の種が地上にまかれ、芽を出し、生長し、種に従って実と種を付ける備えができた時、神々は彼らの地上の園を肥沃で美しい所となすべく、万物を組織された。また、神々は「大空に諸々の光を組織し」た。これによって「季節」と、「日」と「年」を数えるための基準が生じるようになったのである。この時にどのような変化があったのかを知るすべはないが、地球は太陽、月、星と現在あるような関係を取るに至った。少なくとも、それらの天体の光が、新しく創造された地球を包む霧の中に輝き出したのである。これによって、地表に立ち込めていた霧が、間もなく出現することになっていたすべての生命に対する独自の役割を果たす備えがなされたのである。(モーセ2：14-19；アブラハム4：14-19)

第5日—魚、鳥、「水」の中に棲む「あらゆる動く生き物」がこの日に創造された。神々はこれらの動物を、新たに創造された地球に置き、こう言われた。「豊かに生めよ殖えよ、海の水に充ちよ、また鳥は地に殖えよ」。人間にも与えられ、またすべての生物にも当てはめることのできる同類の戒め同様、この命令も即座に具体的な形となって現れることはなかった。しかし、それは間もなく実現することになっていたのである。水生動物と鳥類に与えられた、生めよ

殖えよというこの戒めには、「その種類に従」ってという制約が付いていた。別の種への進化ということは、神のみこころにはなかったのである。(モーセ 2 : 20-23 ; アブラハム 4 : 20-23)

第6日— この日は創造の中で最も輝かしい日である。6日目の早い時期に、大いなる神々は「地の獣をその種類に従い、家畜をその種類に従い、地のすべて這うものをその種類に従って造りたり。」ただし、その繁殖については、他のすべての生物にも適用される制約が付けられていた。すなわち、種に従わずに繁殖はできないという条件である。

私たちがこれまで考察してきたことは、今やすべて成った。しかし、人間についてはどうだろうか。地上に人間は現われただろうか。人間の姿はまだ見えなかった。そこで神々は互いにはかり、こう言われた。

「いざわれら降り行きて、われらのかたちかたどに象りてわれらの像すがたの如くに人を造り……」そして、神々は「降りてその像の如くに人を組織したまえり。すなわち神々の像の如くにこれを造り、男と女に造りたまえり。」神々ははかり合った通りのことを行ない、創造の過程の中でも最も輝かしい業を成し遂げたのである。人間は神の意志に従って前進する最高の被造物である。人は永遠の御父のかたちに造られ、万物を「治め」る権能を与えられた。そして最後に、神は御自身のみこころが永遠に進展していくように、「男と女」を祝福し、こう命じられた。「豊に生めよ、殖えよ、地に充ちよ、

地を従わせよ、また海の魚と空の鳥と地の上に動くすべての生物を治めよ」。6日目の終わりに、神々は自らの創造の働きを見て満足し、「造りしすべてのもの」を見て、「甚だ善し」とした。(モーセ 2 : 24-31 ; アブラハム 4 : 24-31)

以上が創造に関して、神から啓示された事柄であり、モーセの書とアブラハムの書、ならびに神殿での教えをひとつに要約したものである。6日目が終わった次の段階のことについて、モーセの書には次のように書かれている。「かくの如く天地成りぬ。その万群ことごとくまた然り。」そして主は「第七の日」に休まれた。(モーセ 3 : 1-3)

主が私たちに、創造に関するこれらの啓示を与えられたのはなぜだろうか。これらの啓示が与えられたことにはどのような目的があるのだろうか。これらについて知ることは、自らの救いを全うし、私たちの主であり万物の創造主である御方に心を注ぐ上でどのように役立つだろうか。

言うまでもなく、私たちに与えられている啓示の中に、不必要なものは何もない。主がなされるすべてのことには、目的がある。主は私たちに、み言葉を蓄え、その隠れた深い意味をよく考え、完全に理解するよう望んでおられる。実際にそうしている人々は、創造に関する啓示にはふたつの大きな目的があることを理解している。その広い意味での目的は、私たちに試しの生涯の何たるかを理解させることにある。この試しの時期にあらゆる人は試しを受け、「何

●キリストと創造

偉大な造り主は贖い主となり、人類を墮落の影響から解放し、不死不滅と永遠の生命を与える者となられた。



にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを」なすかどうか見られるのである。(アブラハム3:25)具体的な目標は、啓示された神の教えの基を成す、主イエス・キリストの贖いの犠牲について理解させることである。

6日の間にあった事柄と、7日目に主が休まれたことについては単に出来事の記述があるのみで、創造に関する記録の意図するところが明確にされていないという考えはもっともである。主は、モーセの書の3章に書かれているように、創造の目的と本

質を続けて説明しておられる。主はここで創造に関して解説をしておられるのである。ここに明らかにされている幾つかの事実と原則を知らずに、何が創造の真の教義であるかを理解することはできない。主御自身によるその解説は、時間的な流れに沿った記述の中に挿入されているが、それはその記述の真義を理解させるためである。したがって、その解説には時間的な整合性はない。主が創造の過程において順次行なわれた事柄についての解説なのである。

主は創造に関するその解説を始めるに当たり、6日の間に行なわれた業に触れて次のように言われた。「われ主なる神の天地を造りたる日に天地の創られたる時、天地の生成したるかはかくの如し。」(モーセ3:4) 確かにその業は成され、啓示も与えられている。しかし、それを理解するには、なお幾何かの真理が必要である。それは、万物がすでに前世において存在していたことと、地球とすべての被造物が初め創造主の手から生まれた時は不朽性を有していたことに関連する真理である。このふたつの概念がひとつの文章の中に織り込まれている。また、そこに用いられている言葉には二重の意味があり、前世の状態と、初めて物質的な創造が行なわれた時のことの両方に当てはめられるものもある。

そして主は、野のすべての草や木を、まだ地上に植えない内に創造したことと、天においてすべての人間を創造したが、地を耕す人がひとりもいなかったことについて

語られた。(モーセ3:5参照)主がここで、万物の前世における存在を言われたのは明らかである。この地球を初め、人、動物、魚、鳥、植物などはすべて、最初霊として存在していたのである。その起源は天であり、地球が創造されたのは、それらのものに物質という衣を着せるためであった。

「そはわれ主なる神、わが語りしすべてのものを、これらがいまだ地の面に自然に在るに先だち霊として創りたればなり。」この言葉は、霊の創造として考えるなら、真の意味が理解できるであろう。しかし、それにはさらに重大な意味がある。続けて次のように書かれている。「またわれ主なる神、雨を地の面に降らせず……地の面にも水の中にも空の中にもいまだ肉ある者なかりければなり。されど、われ主なる神、言を出したれば霧地より上り来り土地の面をあまねく湿したり。」(モーセ3:5-6) 主はここで、自ら先に語られた事柄、6日の間にあった事柄、そして、モーセの書2章に述べられている物質的な創造の記述について言っておられる。主はそのようにして造られた物は、霊的な存在であり、先に挙げた理由から、「地の面に自然に在」ったのではないと言っておられる。

ここで信仰箇条第10条について考えなければならぬ。「われらは……地球は元にあらたまりて樂園の栄えを受くることを信ず。」つまり、最初に造られた時、地球は樂園の状態で、死がなかったということである。そして、主が再臨し、福千年の時代が始まる時、地球は再び樂園の状態に戻る。

●キリストと創造

地球は再新され、義人が住む新しい天と地になるのである。その日には、すでに知らされているように、「死ぬることなきを以て如何なる悲しみもあることなからん。」(教義と聖約 101 : 29)

このように、最初に創造された世界は楽園の状態^{ふきしやう}で、死や腐朽性はまだ入り込んでいなかった。地上には滅びゆく性質の体を持った生物は存在していなかった。創造はすでに終わっていたが、死が入り込んでくるのはまだ先のことであった。万物が不死不滅の状態に造られていたのである。リーハイはその状態の時のことをこう言っている。「そして創造された万物は造られた後の状態そのままに続いてあったに違いなく、また必ずそのまま永久に続いて終りがなかったであろう。」(II ニーフアイ 2 : 22) もし死がないなら、必然的に、万物はそのまま永遠に命を保つことになる。

創造に関する主御自身の解説がさらに次のように続いている。「われ主なる神、土の塵^{ちり}を以て人を造り、生命の息をその鼻孔^{はなのあな}に吹き入れたり。人すなわち生ける『霊の結合体』となりぬ。すなわち地の上に於ける最初の肉ある者にしてまた最初の人間なり。さりながら、すべてのものは前に創られたるがこれらはわが言によりて霊として造り為^なされしなり。」(モーセ 3 : 7) 何と深い意味を持つ言葉ではないだろうか。アダムの肉体は、神が彼を造るために降りて来られたその地上の塵で造られたのである。アブラハムが言っているように、アダムの「霊」はその肉体に入った。(アブラハ

ム 5 : 7 参照) こうして人は不死不滅の生ける『霊の結合体』となり、肉体と霊がひとつに結び合わされたのである。まだ死が入り込んでおらず、アダムは他の万物と同じように、霊的な存在として造られていた。その後、アダムが墮落したことによって、腐朽性が持ち込まれ、子孫が殖えるようになり、死が入り込んできた。墮落した人間は死すべき存在となったのである。アダムの肉体は滅びゆくものとなり、「地の上に於ける最初の肉ある者」となったのである。そしてアダムの墮落の影響はすべての被造物に及ぶことになった。万物が墮落し、死すべき存在となった。死が世界に入り込み、君臨した。そして繁殖が始まり、偉大な永遠の主のみ業が前進を始めたのである。

このように、万物は最初天において霊として造られ、後に死ぬことのない存在として造られ地上に置かれた。「霊として造り為^なされしなり」とあるが、これは、まだ死がなかったという意味である。その肉体は地球に存在する元素でできていたが、墮落によって死が入り込んだ後の滅びゆく肉体とは違い、霊によって生かされる体であった。滅びゆく肉体は死に従属するが、霊によって生かされ、不死不滅の性質を持つ肉体は死の支配下でない。このゆえに、墮落、腐朽性、死が必要となってくるのである。

「われ神、エデンの東^{かた}の方^{かた}に一つの国を設けてわが造りし人をそこに置きたり」

(モーセ 3 : 8) と聖典にある通り、父祖アダムはエデンの園に住んだ。アダムは神が創造した最初の人間であり、墮落によっ

て最初の肉ある者となった。墮落の結果、すべてのものが霊によって生きる状態から、死すべき状態へと変化したのである。聖典にはこう書かれている。「われ主なる神、人の観るに美しきすべての樹を自然に土地より生ぜしめ、かくて人これを観るを得たり。このすべての樹もまた一種の生ける『霊の結合体』となりぬ。」(モーセ 3 : 9)

この記述の中には、他の種への進化などということはまったく書かれていない。ここでは、「すべての樹」と「すべてのもの」について語られているのである。聖典はそれらをひとつの集合体として、次のように続けて書いている。「それは、われ神それを創りしその世界に、まことにわれが人の用いんために備えたるすべてのものすら創りしその世界にそのまま在りたればなり。而して人はその食うに善きことを観たり。」(モーセ 3 : 9)

主の創造の解説の中には、次のようにも書かれている。「われ主なる神、土よりして野のすべての獣と空のすべての鳥とを造り、……彼らもまた生ける『霊の結合体』なりき。われ神、生命の息を彼らに吹き入れたればなり。」(モーセ 3 : 19) そして、比喩的にイヴはアダムの肋骨から造られたと述べ、死も、現世の試練もなかったその時、「かの男とその妻とは、二人共に裸のままにして恥しく思わざりき」と続けている。(モーセ 3 : 21-25 参照)

私たちは墮落に関連して、主は園の中央に「善悪を知る樹」を植えられたと教えられている。(モーセ 3 : 9) そして、アダム

とイヴに次のような戒めが与えられたのである。「この園のすべての樹よりは汝の意のままに食うことを許さる。されど善悪を知るの樹よりは汝食うべからず。然はあれども、食うと食わざるとは汝に任す、そは汝に与えられたればなり。されど、わが汝に禁じたるを忘るな。汝これを食う日には必ず死ぬべければなり。」(モーセ 3 : 16-17) 再び比喩的な言い方がされている。善悪を知る木の実を食べたということは、最初の両親が、自分たちの肉体が不死不滅の状態から死すべき状態へ変わるように、律法が求めるすべてのことに従ったということである。

モーセの書第4章には墮落についての記述がある。アダムとイヴが禁断の実を口にして、地は呪われ、いばらとあざみを生じた。つまり、地球が現在ある状態に墮落したのである。イヴは「すべての生きるものの母」(モーセ 4 : 26) と呼ばれ、アダムとの間に「息子娘」をもうけることになった。(モーセ 5 : 3)

このように、人は墮落し得る存在として造られていたのである。アダムは墮落し、人類に腐朽性と生殖の力と死とをもたらしたが、それによって主イエス・キリストの贖いの犠牲の祝福にあずかれるようになった。人類はアダムの墮落によってもたらされた肉体と霊の死から贖われ、不死不滅と永遠の生命を受けることができるようになった。創造、墮落、贖いはひとつに結び合っているのである。

万物の創造に関するこれらの啓示された

●キリストと創造

真理は、この世の数多くの仮説や理論に真っ向から反対するものである。しかし、この真理は神のみ言葉であり、私たちが受け入れなければならないものである。宇宙、地球、人間、そしてあらゆる生物の創造に関して知らされている知識は、その未知の部分と比較すると、極めて微々たるものであるということ、私たちは率直に認める。しかし、主は私たちに、この試しの生涯に必要なだけの奥義を与えておられる。

主はこれまで基本的な真理を明らかにしてこられたが、私たちはそれによって、創造の真の教義を理解することができる。それでは、その教義というのはどのようなものだろうか。イエス・キリストは地球とその上に存在するすべてのものの造り主であり、贖い主である。ただし、人間を造られたのは、私たちすべての者の御父、主なる神御自身である。御父が地上に降りて来て、御自身のかたちに男と女とを造られたのである。地球と他のすべてのものは不死不滅の状態に造られたが、墮落し得る存在でもあった。偉大な造り主は贖い主となり、人類を墮落の影響から解放し、不死不滅と永遠の生命を与える者となられた。創造、墮落、贖いは永遠の原則を支える3本の柱である。キリストを造り主、贖い主として受け入れる者は皆、キリストと共同の相続人となることができ、御父が持つすべてのものを受け継ぐ。これらのことが創造の真の教義である。

確かにキリストは造り主であり、贖い主である。テンプル・スクエアにある訪問者

センターの円形の大広間には、バーテル・ソルバルセン作の大理石のキリスト像が立っている。その堂々たる大理石像は、造り主が永遠の世界のただ中に立っておられるように見える。円形の天井と壁面には、組織された宇宙を運行する無数の天体が描かれている。この素晴らしい作品を見ると、わずかながらに創造の奇跡を垣間見る思いがする。

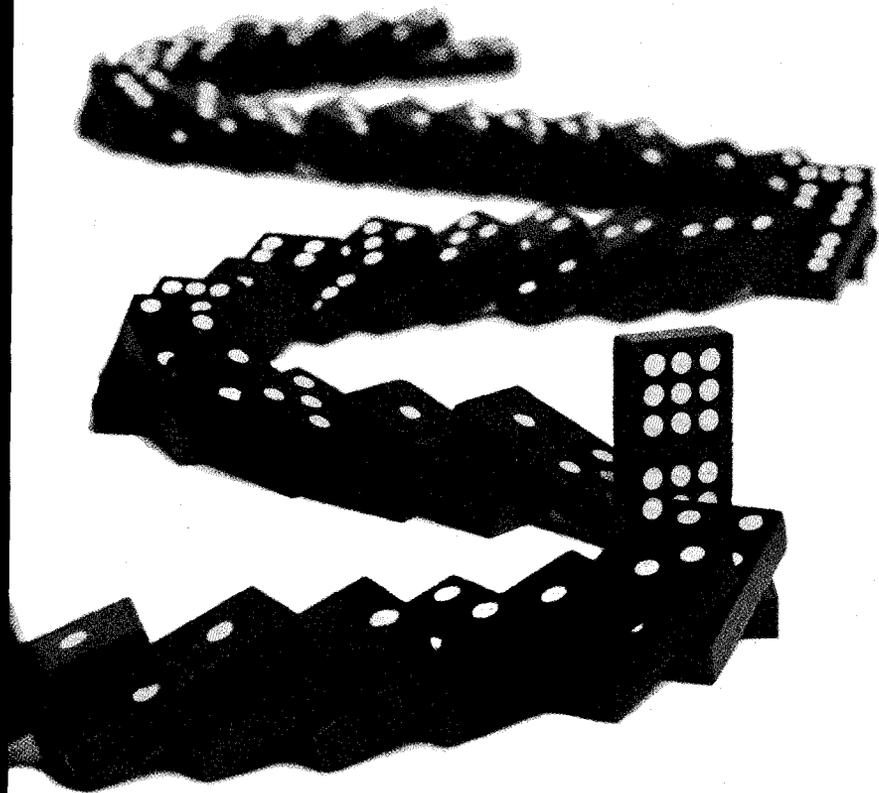
また、人々を癒し、祝福したその神聖な手と、ほこりにまみれた小道を歩いた足には、釘跡が見える。その足で歩まれた地は、御自身が造られたものであった。そして脇腹には大きな傷跡がある。その傷から流れ出た血と水は、贖いが完成されたことのしるしであった。贖い主の奇跡の一端が見えるようである。

これらすべてのものの奇跡を考える時、私たちの目と思いは、その優しくな顔に引き付けられ、伸ばされた腕に何か私たちが招き寄せる力を感じる。この素晴らしい大理石像は呼吸をし、次のように言っているかのようである。「わたしは道であり、真理であり、命である。」(ヨハネ 14:6)「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ 11:28)私のもとへ来なさい、そうすれば救いを受けることができる。私のもとへ来て、私を造り主、贖い主として受け入れるすべての者に世の初めから備えておかれた王国を受け継ぎなさい。来て、私とひとつになりなさい。私はあなたの神である。

モ ル モ ネ ー ド

負けないで!

あなたは どんなことでも
みんながやっていたら
やりますか?





お話を聞いてお行きなさい

そとにはアイルランドの風がふき
すさび、つめたい雨が小屋の
まどガラスをうっていた。せいさん
会に集ってきた支部の人たちは、ス
トーブをかこんですわっている。部
屋の中はとてもあたたかい。パトリ
ックの心もあたたかくなった。それ
は、アメリカなまりのえい語を話す、
わかいせんきようしの言葉を聞いた
からだった。せんきようしは言った。
「ふくいんは、しんじつです。アイ

ルランドで神様につかえられること
をかんしゃします。」

その言葉を聞いて、パトリックは
とても19歳になるまでまっていられ
ないと思った。「モルモンけいのこ
とを友だちに話さなければ。」パトリ
ックはモルモンけいを、しっかりと
だきしめた。そのモルモンけいは、
パトリックの家族にふくいんを教え
てくれたせんきようしが、ソルトレ
ーク・シティーから送ってくれたも

のだった。

パトリックは、ロバのフロップスを毎日よう日、いつも集会所の外にまたせておいた。どんなに風がふいても、フロップスはちゃんとそこにいた。

集会がおわり、パトリックは家族と一緒に帰りみちを歩きながら、フロップスに話しかけた。「ぼく、せんきょうしになりたいなあ。どうやって、トムやみんなにふくいんのことを話したらいいかなあ。」しかしフロップスは首をパタパタさせて、ちょっとまばたきしただけだった。

しばらくたつたある日のこと、パトリックはウシやヒツジやニワトリのあいだをすりぬけながら、村へといそいだ。その日は遠くから大ぜいの人々がやってきて、いろいろなものを売ったり買ったりする日だった。パトリックは村に行つてトムに会い、その夜の支部のかつどうのことを話したいと懇っていた。支部ではその夜、子どもから年よりまでアイルランドダンスをして楽しむのだった。「さばん、トムにふくいんのことを話そう」とパトリックは懇った。

ふと見ると、トムがくだもの店



の前にいた。声をかけようとする
とつぜん目の前に、海草の大きなカ
ゴをせおったマイケルが出てきた。
パトリックはせのびをしたり、マイ
ケルのよこからのぞいたりしたが、
もうトムはいなかった。パトリック
はしかめつづらをして、マイケルを
見た。学校でも、マイケルは海草の
においがした。村の人たちは春にな
ると海草をとって、ジャガイモ畑の
コヤシにする。マイケルは一年中海
草をとって、工場に売っているのだ
った。その時、パトリックにある考
えがひらめいた。「いや、だめだ。
マイケルをさそうなんて。マイケル
は友だちじゃないもの。」パトリッ

クはマイケルをすきではなかった。
マイケルは学校で先生によくいたず
らをしたし、先生が荷かしつもんを
すると、ゲラゲラわらったりした。

「おいで、フロップス、マイケル
よりもふくいんにふさわしい人はい
っぱいいるよ。」パトリックはいっ
た。でも、マイケルのことが心から
はなれなかった。次の白の朝、パト
リックはフロップスを単につなぐの
をわすれていた。

「荷を考えこんでいるんだね。」
荷単から石炭をおろしながら、お父
さんがたずねた。

「ねえ、お父さん」パトリックは
のろのろとたずねた。「神様はぼく



たちがしたくないことを、するようについていうこともあるの。」

「それはあるさ。しかし、なぜだね。」

「何かさあ、神様がマイケルにでんどうしなさいっていつているような気がするんだ。でも、ぼくはマイケルがきれいな。時々、いじ悪をするんだもの。」

「そうかい。しかし、神様がいい人間しか愛さないとしたら、愛される人間なんかいないだろうよ。お前のことだって、いつも愛してはくれないことになるわけだしな。神様はきっと、マイケルにもふくいんを知ってほしいと懇いていらつやるよ。」

「おいのりをすれば、少しはマイケルをすきになれると懇う？」

「そうだな。だんじきもすれば、なおいよいよ。」

パトリックがふりかえると、マイケルが海草をひきずりながら歩いてきた。

パトリックは、おそろおそろお父さんを見た。

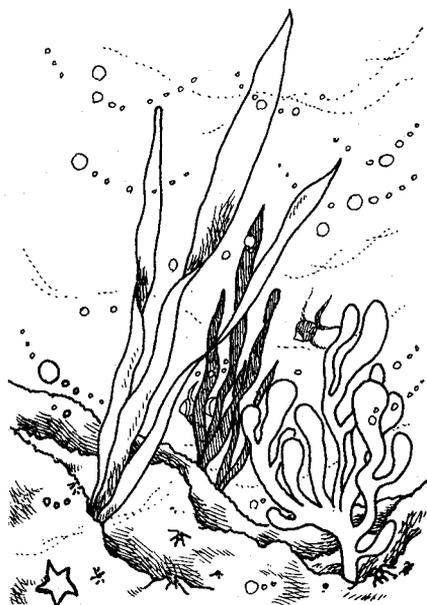
「今だよ、パトリック。」

パトリックはぐつとつばをのみこみ、心の中でおいのりしながら声を

かけた。「ねえ、マイケル。手つだおうか。みじかく切れば、フロップスのせ中ののせてはこべるよ。」

パトリックはマイケルと一緒に岩にまとわりついた海草を切った。そのあいだ、フロップスはじっとまっていた。何時間も、ふたりは岩の上にしゃがんで海草を切った。雨がはげしくなってきたのにも、海をわたる風の音が高くなってきたのにも気づかなかつた。夕やみがせまり、しおもみちてきた。

パトリックは風の中で、大声でさげんだ。「マイケル、もうやめよう



よ。」その時だった。とつぜんマイケルがよろよろとして、海におちた。パトリックはおどろいて、かけよった。

「足が岩にはさまったんだ。」マイケルはいたそうにいった。パトリックはそのぬるぬるした岩をつかんで、動かそうとした。しかし、岩は動かなかった。「ぜんぜん動かないかい。」

マイケルは顔をしかめながら、足を動かそうとしたが、だめだった。

そうこうするうちに、しおがみちてきた。「どうしよう。」

「おいのりしよう。」とつぜんパトリックがいった。

「おいのりだって？」マイケルは、パトリックの大きらいな、あの、人をばかにしたようなわらい方をした。しかし、とつぜんわらうのをやめると、「よし、しよう」といった。

パトリックはいのつた。すると、こわくなくなり、どうしたらよいかわかった。パトリックはフロップスをつれてきて、岩にロープをかけ、それをフロップスにつないだ。はじめのうち、フロップスはロープをひくのをいやがった。そして、だ

んだんかさをましてくる水を足でけり、めいわくそうに、しっぽをふつた。

「それっ、フロップス、ひくんだ。パトリックがせかせせと、フロップスは足をぴんと立てて、ロープをぐいとひっぱった。すると岩が動き、マイケルの足がぬけた。

パトリックの塚へいそぎながら、マイケルはいった。「とてもしんじられないよ。岩がおいのりをしていた時、すごくしずかな気持ちになったんだ。そして、きつと大じょうぶだって、思ったんだよ。」



家につくと、お母さんがウシのシ
ツポのスープを持ってきてくれた。

「フロップスにのせて、家までお
くつてあげなさい」とお父さんが
いった。

マイケルがびつこをひきひきドア
の所へ歩いていった時、パトリック
は、テーブルの上のモルモンけいに
気がついた。パトリックは、はっと
思いついたようにモルモンけいをつ
かむと、マイケルの後ろから声をか
けた。「ねえ、これを持ってお行き
よ。とってもいい本なんだから。」

それから2週間、パトリックは毎
日マイケルと一緒に海草をとった。

「どうしてあの時、大切なモルモ
ンけいをマイケルにあげちゃったん
だろうなあ。」パトリックは、自分
でもふしぎだった。

ある日、パトリックは赤ちゃんを
だいた女の人に会った。

「あのう、パトリックさんをさが
しているんですが。」

「ぼくがパトリックです。」

「まあ、そうですか。おすこにモ
ルモンけいをくださって、ありがと
うございます。去年、夫がしにまし
てから、ずっとさがしていたんです。

わたしも前に人からいただいたん
ですが、その時は読みもしなかったん
です。そして夫が死ぬ少し前に赤ん
ぼうが生まれて、しごととはみんなマ
イケルにまかせつきりになってしま
いました。生活は、めっちゃくちゃで
した。わたし、あの本を見つけて読
まなければならぬと思っていたん
です。」

パトリックは、ただもうおどろい
て、つ立っていた。

「それから、もうひとつおねがい
があるんです。わたしどもに、教会
のことをもつと教えてくれませんか。」

次の日よう日、パトリックはせん
きようしたちとマイケルの家へ行っ
た。家へ入って、パトリックはまた
びつくりした。家の中は、ふくいん
を聞きたいというマイケルのしんせ
きの人でいっぱいだったのだ。

せんきようしたちは、イエス・キ
リストのふくいんについて話しはじ
めた。マイケルは、顔をかがやか
せて聞いていた。パトリックは、テ
ーブルの上のマイケルにあげたモル
モンけいに目をとめた。「マイケルに
あげてよかった」とパトリックは思
った。



エリヤって、どんな人？^{ひと}

パット・クレアム





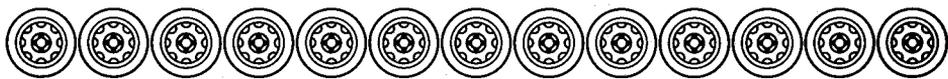
神^{かみ}さまは、ジョセフ・スミスにこうおっしゃいました。「わたしは、よげんしゃエリヤをつかわして、むすびかため^{らから}の力をあたえる。エリヤは、わたしがむかし、あなたたちのせんぞとむすんだせいやくを、あなたたちに^{おし}教える。そして、あなたたちに、せんぞのことを^{おし}思わせる。」(きょうぎとせいやく2:1, 2)

ずっとむかしから、神^{かみ}さまはよげんしゃたちをとおして、こうやくそくしておられました。「生きて^{ひと}いる人も、しん^{ひと}だ人も、すべての人^{ひと}がバプテスマと、しんでんのしゆくふくをうけるときがくる。」

キリストがお生まれになる900年^{ねん}も^{まえ}前に、エリヤは、むすびかためのかぎをもっていました。そのエリヤが、すえの^ひ日になって、また、むすびかためのかぎを、ジョセフ・スミスにあたえたのです。こうして、けいずと、しんでんのわざが、^{おこ}行なわれるようになりました。

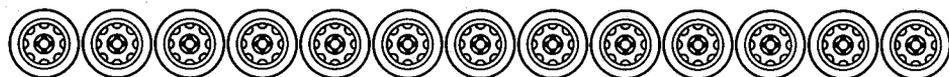
次^{つぎ}の1から10までの文^{ぶん}に合^あう絵^えを見^みつけて、番^{ばん}号^{ごう}を入^いれましよう。

1. 人^{ひと}々^{びと}がわるいことをするようになったので、エリヤは^{てん}天を^{とし}てしまいました。それで、^{あめ}雨^{あめ}がふらなくなりました。
2. ききんのあいだ、カラスがエリヤのところへ、^た食^{もの}べ物^{もの}をは^{こん}で^{でき}ました。





3. やもめは、さいごのこなとあぶらで、エリヤにパンを^{つく}作ってあげました。エリヤは、やもめの家から^い食べ物^{もの}がなくなることはない、とやくそくしました。
4. やもめの男の子^{おとこ}が、びよう^き気でしにました。エリヤがおいのりをすると、男の子^{おとこ}は^い生きかえりました。
5. エリヤは、みんなに^{ほんとう}本当の^{かみ}神さまをしんじさせようと思^{おも}いました。エリヤは、^{さいし}バアルをしんじる^し祭司たちとあ^あらそって、^{てん}天から^ひ火を^ふらせました。
6. エリヤは、^{うわぎ}上着で^{かわ}ヨルダン川^{みず}の水を^{かわ}うち、^{かわ}川を^わけました。
7. エリヤはしなずに、^ひ火の^{くるま}車で^{てん}天に^{あが}上っていきました。
8. キリストが^うお生まれになる^{ねん}400年^{まえ}前、^マラキはこ^うよげんしました。「エリヤがもう^{いちど}一度^{ちから}やってきて、むすびかた^めのかぎと^{ちから}力をあ^あたえるだろう。」
9. 1823年^{ねん}9月^{がつ}21日^{にち}、^{ジョ}セフ・^スミスは、^モロナイのおとずれをうけました。モロナイは、^{きん}金^{ばん}の^{こと}を^{はな}話した^{あと}後で、エリヤがくるとい^いう^マラキのよげんのことを^{はな}話しました。
10. 1836年^{ねん}4月^{がつ}3日^か、^{ジョ}セフ・^スミスと^{オリ}バー・^{カウ}ドリは、^カートランドし^んでんで、エリヤのおとずれをうけました。マ

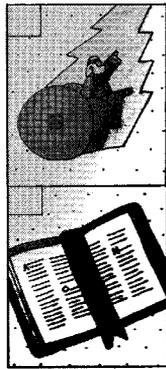
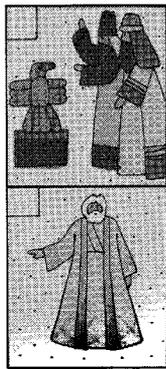
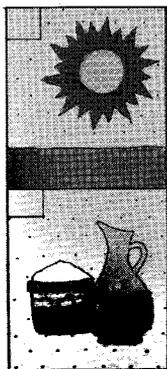
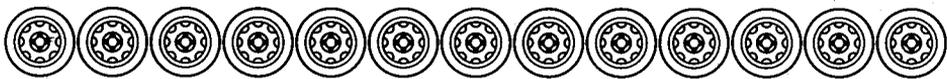




ラキのよげんが本当になり、家族は、えいえんのむすびかためをうけることができるようになりました。また、しんだ人のために、けいずと、しんでんのわざも、できるようになりました。

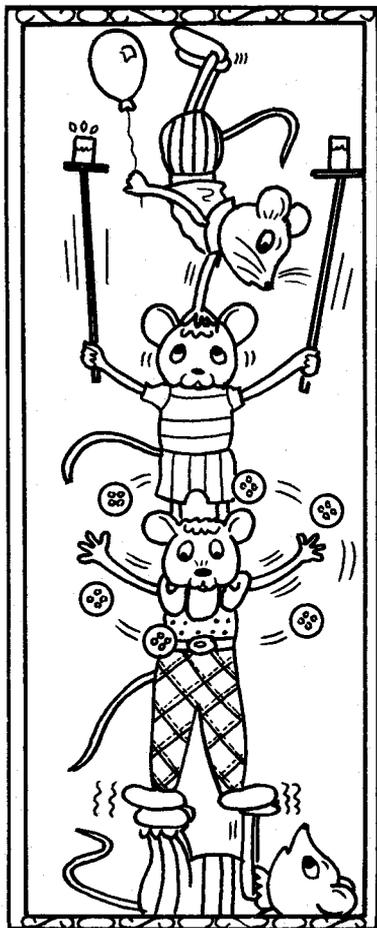
エリヤのお話のゲームをしましょう。お父さんやお母さんと、一しよにするといいでしょう。

1. まず、エリヤのお話をして、絵を正しいじゅん番にならべましょう。
2. せいてんの中から、エリヤのお話を書いてあるところを、見つけましょう。(列王上17, 18 列王下2)
3. 絵をばらばらに切って、正しいじゅん番に、紙にはりながら、エリヤのしたことについて、話し合しましょう。



まちがいがし

●かみにつつたえに、
まちがいが16あります。
よみてみつけてください。



どうばいの？ すれいのの？

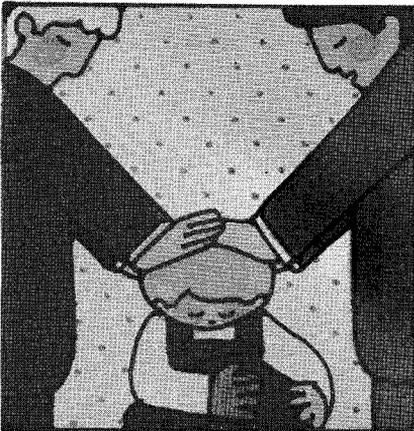
マリリン・バートン・クラーク



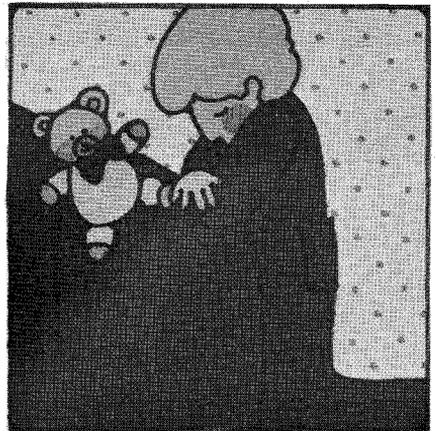
1. ときには、びょうきになったり、けがをしたりします。



2. てんのおとうさまは、あなたをあいししています。だから、ふさわしいひとに、しんけんを、おあたえになりました。



3. しんこうがあれば、あなたもそのひとから、たすけてもらうことができます。あなたは、おとうさんや、ホーム・ティーチャーから、しゆくふくをうけることができます。



4. てんのおとうさまは、いちばんよいほうで、あなたをたすけてくださいます。いつも、てんのおとうさまに、かんしゃしましょう。

末日聖徒の女性、全米ヤング・マザー・オブ・ザ・イヤーの榮譽に輝く

ヤングマザー・オブ・ザ・イヤーに選ばれたのは、ペンシルベニア州オレフィールドのキャサリン・クライヤー・ピーターソン姉妹（30歳）です。これで末日聖徒の女性が、2年連続この榮譽に輝いたことになります。昨年表彰を受けたのは、ユタ州オーレムに住むラドーン・ジェイコブ姉妹です。

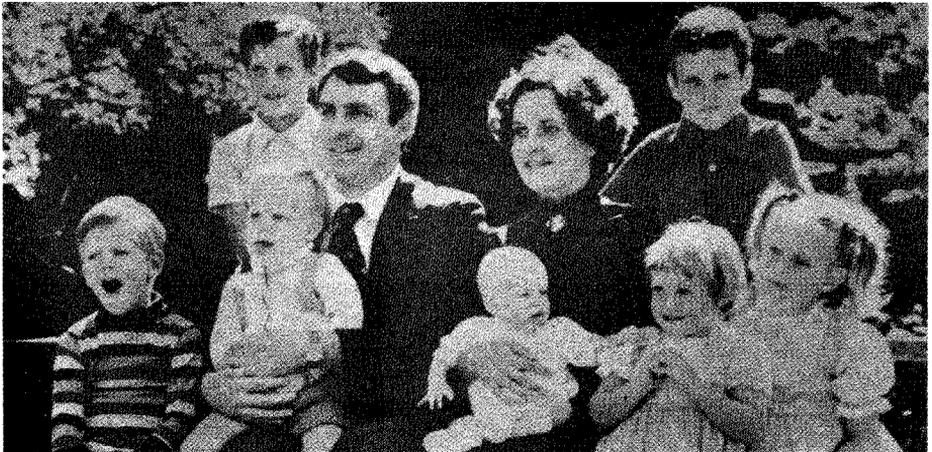
ピーターソン姉妹は、スクラントン・ペンシルベニアステーク部アレントاونワード部に所属しています。彼女は、ニューヨーク州ニューヨーク・シティーで行なわれる、アメリカン・マザーズ全国大会のヤング・マザー州代表で、少なくとも8人は選ばれている末日聖徒の州代表のひとりです。

なお、アメリカン・マザー・オブ・ザ・

イヤー州代表の方も、少なくとも5人が协会会员です。

全国大会に出場するマザー・オブ・ザ・イヤーとヤング・マザー・オブ・ザ・イヤーの候補者は、全米で開かれる州大会で選出されます。また候補者は一般家庭のほか、教会、市民団体から推薦されます。その後州代表が全国大会に出場し、最終審査が行なわれます。通常、候補者の中には、末日聖徒の女性が多く見受けられます。

今年度のヤング・マザー・オブ・ザ・イヤーのピーターソン姉妹は、イリノイ州シャンペーンで生まれ、1973年、ブリガム・ヤング大学で優秀な成績を修め卒業しました。専攻は体育教育です。そして1977年にトム・ピーターソン兄弟と結婚し、7人の



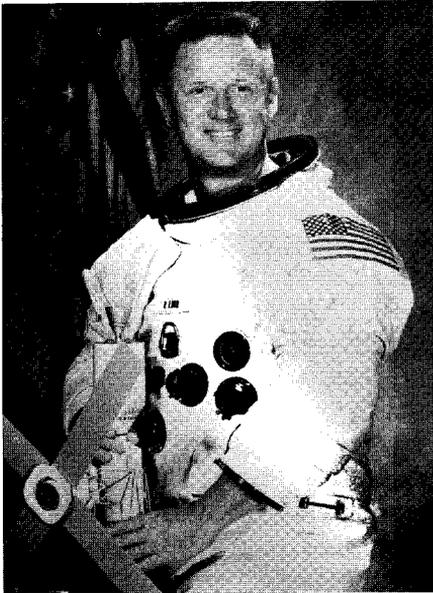
●ヤング・マザー・オブ・ザ・イヤーに選ばれたペンシルベニア州のキャサリン・クライヤー・ピーターソン姉妹および夫と7人の子供。「チャーチニュース」より転載。

子供がいます。

ピーターソン姉妹は現在ワード部で扶助教会の教育担当副会長を務めており、過去にはステーキ部扶助教会管理会員の一人、初等協会、日曜学校の教師を歴任しました。また公共図書館や学区地域諮問委員会でも働き、市民として貢献しています。

末日聖徒の宇宙飛行士 来年秋、スペース・シャトルに乗船

ア メリカ航空宇宙局のスポークスマンの発表によると、1984年9月打ち上げ予定のスペース・シャトルに、16年間宇



宙開発に携わってきた、当教会の会員ドン・L・リンド（52歳）の乗船が予定されているという。

フレンズウッド・テキサスステーキ部クリアレクワード部に所属するドン・L・リンド兄弟の乗船が予定されているのは、スペース・シャトル第18回飛行計画で、リンド兄弟にとっては初の大気圏外飛行となる。

リンド兄弟はこれまでアポロ計画、スペース・シャトルの操縦士予備要員として訓練を受けてきた。ユタ州ミッドベイルに生まれ、カルフォルニア大学で高エネルギー核物理学の博士号を修得している。

渡辺ステーキ部長 「第8回発明大賞」受賞

岡 山ステーキ部の渡辺明ステーキ部長は、耐火煉瓦工業界における研究と開発ならびに高性能マグネシア・カーボンれんがの高性能化に関する発明によって日刊工業新聞社と日本発明振興協会の主催による「第8回発明大賞」を授与された。また「熱間流し込み耐火材の開発と実用化」から日本化学会「化学技術賞」を受賞。さらに渡辺ステーキ部長の同工業界におけるこれまでの業績に対し、今年3月に科学技術庁「長官賞」を受賞された。

度重なる受賞に喜びもひとしおであるが、渡辺ステーキ部長は「そんなにおおげさなことではないから…」と謙遜な姿勢を崩さない。(レポーター：岡山ステーキ部幹部書記・高田俊久)

●日刊工業新聞 58.2.19



「信仰と研究」と私

九州耐火煉瓦株式会社勤務
岡山ステーキ部ステーキ部長

渡辺 明

私は因果な商売で、年がら年中新しい事や未知な事柄に頭を没入させ、その世界に浸りっぱなしである。そのためか自動車の運転も、もっぱら姉妹(妻)に任せてある。私がかもし運転すれば考え事の癖があつてまず天国行きは間違いない。

研究開発で外国出張や学会出席、ユーザーとの技術打ち合わせなどで家を空けることが少なくないが、身体は、いたってひ弱である。13年前に患つたペーチェット氏病以来、身体を大切に使っているが、そうもいかず時々病床につく。でも、まあ、元気である。

私がかここまで充実しているのも信仰のお陰である。

研究上行き詰まることはしょっちゅうあ

る。でもあまり諦めたことがない。考えに考え抜くことが好きだからである。苦しいけれども考え抜くことにしている。

問題を解決した時、神が私に与えて下さった暗示への深い感謝の念と、神が弱い私をねぎらってくれた愛の手の肌触りと心から込み上げてくる霊水の温かさを感じる。まれではあるが、感涙することさえある。

何故小才な私に解決できたのであろうか。もっと素晴らしい人々がたくさんいるのにと思うと、いつの間にかそれを使命と感じたり、また私にのみ感ずる神の愛(みたま)を痛切に思うのである。

私の才能では到底解決できないと思つていた事柄が恵みによって賜わる——その気持はだれにも増して幸福に感じている。

しかし、反面傲慢になるのを非常に恐れる。なぜならば、神の恵みを受けられなくなるからである。時折傲慢になったために受けた長い暗闇を経験していたからである。

外国へ出張しても、身体に注意してか觀光はあまりしない。目的のみに集中して、あとはホテルで身体を休めることに留意する。そんな私に外国出張が多いのも、なぜか皮肉に感じて仕方がない。最初、これも試練かと思ったが、最近は恵みと感じている。お陰でスタミナ配分の術を私の身体なりに会得したからである。

もう5年前になると思うが、ソ連に出張し、ソ連アカデミー主催で、私の単独講演と質疑応答で5時間近く拘束されたことがあった。私なりの研究内容を通して、ソ連の学者、技術者と交流できた喜びはあったが、反面共産圏という悲しきで、個人的な反響は感じたものの国家体系での反響を知る由もなく、いまだに私の研究発表がソ連にどう役立ったのか、あるいは無駄だったのか分からない。

11月の零下15～20°C という厳冬で、とうとう滞在中に肺炎を患ってしまった。しかし日本に帰るまで風邪だと思っていたので、そんなせっぱ詰まった気持ちはなかったが帰国して2週間近く床についてしまった。ソ連、チェコスロバキア、ポーランドと20日間旅を続けたので、肺炎を患っていてよくぞ帰国できたものだ、あとで思い起こすと血の凍る思いがした。その期間、神に守護されていたと強く感じている。

20年近くも前、私はマイクロメリテックスの研究で、熱膨張の異なる2種類の粉体充填体が熱間でその充填性が弛緩する現象を秒値理論化する際、2種類の粉粒体の

膨張の差が大きくなるにつれて何粒子間にもその影響が及ぶという要因条件を見つけ出すのに相当苦勞し、考えるともなく満員のバスに乗った時一瞬のひらめきで解けたことを覚えている。

私は粉粒体が三次元的にランダム充填し、その変化に及ぼす影響もランダムにしか整理できないものと思い込んでいた。満員バスに乗った時、バスが揺れ動く度毎にぎゅうぎゅう詰めの満員状態がところどころにやや弛緩する状態を見て、二次元的に解く試行を思いついた。

私も先人が経験したプロセス通り、理論の積み重ねで段階的に解いてゆくのではなく、断続的な苦闘とその架け橋との間に何か暗示を意味する不思議な小事があって、それにぶつかって解決することを感じた。

人間の能力を越えたまったく不思議な小事への遭遇である。

ある偉人がこう言っている。

「人間の能力は20パーセント、いや10パーセントしか関与しない。人間の努力(苦闘)80パーセントがすべての成果を生む。」もちろんこれがすべてではないと思うが、大体は当たってると思う。

今、私にとって神への信仰は、神なくして働くことも生きることもまた死ぬことさえできないくらい、重要で不可欠なものとなっている。また家族も教会も仕事も神の助けによって私と密接な関係にあり、神によって生かされていることを強く感じている。

神は実に生きておられ、日々私たちを導いておられることを証する。(わたなべ・あきら 1936年生まれ、九州耐火煉瓦株式会社取締役研究部長・工学博士)

岡山ステークス部・広島ステークス部
高松ステークス部・山口地方部合同

第2回大山指導者会 開かる

6 月10, 11, 12日の3日間、岡山ステークス部、広島ステークス部、高松ステークス部および山口地方部合同の「第2回大山指導者会」が、大山隠岐国立公園の雄大な自然に囲まれた鳥取県立大山青年の家で開催され、安芸宏地区代表の指導の下に、総勢120名が参加した。

昨年開かれた第1回の指導者会では、高松ステークス部神崎武二郎ステークス部長の発案により、「指導者はどうあるべきか」について自由に討論し、指導者たちの心の悩みをぶつけ合い、問題解決の糸口を見つけることができた。

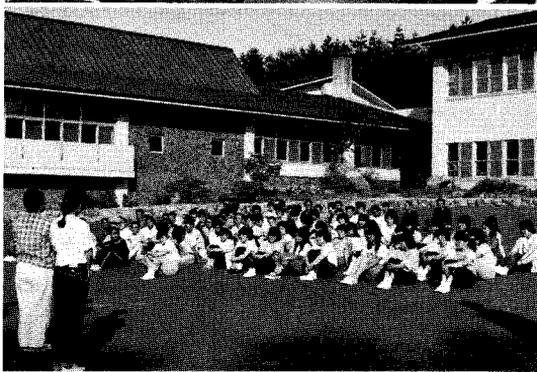
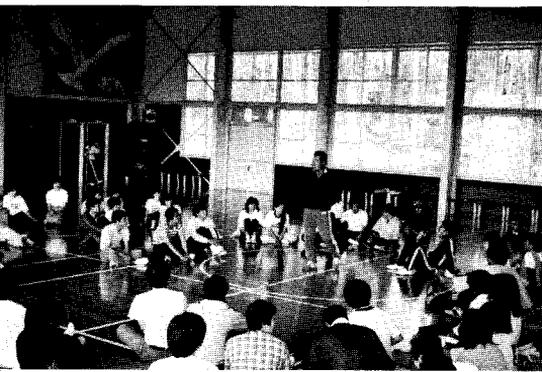
今回の指導者会は、岡山ステークス部溝内俊夫副ステークス部長が実行委員長となって企画され、歩行ラリーやそのほかの活動を通して潜在意識や能力の発掘、チームワーク、リーダーシップ、組織の活発化などについて理解を深め、学ぶことができた。

指導者会は、初日の歩行ラリーより始ま

り、昨年の復習と、新たに指導者としての心構えを、また、グループに分かれての教会実務についての討論会、そしてレクリエーション活動の順に進められた。2日目の夕刻から夜にかけて行なわれた2度目の歩行ラリーで94名がペアを組んだ。この活動からコース図に従って細かい指示を実行する大切さと難しさ、同僚同士の協力と一致の必要性を各自体得することができた。

最終日の証会では、多くの参加者が力強く神を賛美し、「次回をもっと成長して会おう」と再会を誓い合った。(レポーター：岡山ステークス部幹部書記・高田俊久)

●(写真右上)安芸長老の管理の下に開かれた指導者会。●(右下)大山青年の家での夕べの集い。●(左下)レクリエーション活動。





「わが^な為すことには深 き知恵あればなり」 —脳性麻痺の子を抱えて—

東京東ステーキ部東京第5ワード部
高瀬 由利

した。折あしく、丈夫なはずの夫が体調を崩し、血圧上昇のため救急車で病院に運ばれるという事態が発生してしまいました。ただちに精密検査をしましたが、原因は分からずじまいでした。

夫の入院騒ぎの2、3日後には、隣の家が火事で全焼し、あと5分消防車の到着が遅れていたら、自分の家も燃えていたというショッキングな事件がありました。私は娘のことも含め将来が不安になり、その不安が募って一種のノイローゼになってしまいました。夜は安眠ができず、昼は人に会うのも憂うつで、教会にも行かずボランティアの方々も断わるというような状態が2、3カ月も続いたのでしょうか。そんな中で唯一の慰めは、仕事や教会の責任を終えて帰った夫からいろいろな良い話や証を聞くことでした。「神様は生きていらっしゃるから心配しないで。」「真理（娘）はきっと良くなるから」などと慰めの言葉をかけてくれました。夫は、できるだけ側にいて欲しいという私の思いに答えてくれ、神殿の奉仕や高等評議員の仕事を休んでくれました。

そんな3月半ば頃のある日、帰った夫が開口一番次のように言いました。「きょうステーキ部長が話があるというので、高等評

皆さんは阿古屋貝という貝を御存じでしょうか。阿古屋貝は体外から侵入してくる異物を一生懸命包んで、美しい真珠を作ります。私も困難に^{まひ}遭っている時、自分は今真珠を作っているのだと思うようにしています。

私の家族は、母と夫、私、娘の4人です。娘は4歳8カ月になりますが、脳性麻痺という病気のためにまだ立つことも歩くこともできません。

約1年4カ月前に、私は娘の機能回復訓練をドーマン法を使ってやってみようと思決心しました。その訓練はたくさんの人手を必要としますが、教会内外のボランティアの方々が助けて下さいました。ところが、今年の2月でその訓練を始めて満1年が経過したにもかかわらず、思ったほどの効果が見られないため、^{あせ}焦りを感じるようになってきました。

「娘はこのまま駄目になってしまうのではないかと不安ですか？もしそうなったらどうしよう。以前やっていたボバズ法の方が良かったのではないかと」などいろいろな迷っている

議員を解任してくれるのかと思ったら、そうじゃなくて、何て言ったと思う。「高瀬兄弟、今、何を、主はあなたにお望みだと思えますか。主はあなたを東京第5ワード部の監督に召したいと思っていられませんか」と言うんだ。」よりもよってこんな時にと、私たちふたりは抱き合い、悲しくて泣いてしまいました。夫は病気の原因がはっきりせず、娘は脳性麻痺、母は腰痛、私はノイローゼ。荷を軽くしてもらいたい気持ちで一杯なのに、とても耐えられないような荷を負わされたような思いがしました。「主よ、どうして……。」その夜の祈りもただただ涙ばかりでした。

ところが、1週間後に祝福が訪れたのです。それは神崎ステーキ部長が私たちの家を訪問して下さったことです。ステーキ部長については間接的には夫から聞いておりましたし、ステーキ部大会やワード部大会でお話を伺ったこともあり尊敬していましたが、直接個人的にお会いするのは初めてでしたので、何か雲の上の方をお迎えするような感じで、神聖で有り難い気持ちが致しました。ステーキ部長は夫からすでに私のことを聞いていらっしやって、私と、共に悩んでいた母とに2時間以上もお話して下さいました。テレビのスピーカーのように、神様のスピーカーとしてお話ししましたとおっしゃっていました。娘のことは信じて疑わずに訓練を続けなさい、しかし結果は神様にお任せしなさい、と言われました。また、「困難が来る時はチャンスだと思いなさい。困難な中でもニコニコして頑張っていれば、他の人々にも証となり、模範となり、励ましとなるからです」ともおっしゃいました。そして教義と聖約の9章から引

用されて、「我が子よ」という所を私の名前「由利よ」に代えて読んでみなさいとおっしゃいました。「由利よ、すべからく忍耐せよ。わが為すことには深き知恵あればなり。」また、「由利よ、つぶやくなかれ。かくのごとく汝を待遇したるには深き智恵われにあればなり。」確かにその通りだと思いました。

夫はその場で、ステーキ部長の手によって監督の職に按手聖任されました。そしてステーキ部長がお帰りになってから奇跡が起こったのです。私のノイローゼがほとんど治ってしまったのです。長引くと思っていたお医者さんも驚いていました。ステーキ部長の衣に触り、あたかもイエス様の衣に触れて癒された長血を煩う女のように、私も癒されました。

今では、夫も元気に監督の職を努めており、私もボランティアの方々や母の助けを得て、毎日楽しく娘の訓練に励んでおります。とても幸せな思いです。もちろん娘はまだ立つことも歩くことも話すこともできません。しかし私は、この困難をあのお古屋貝のように努力して包み込み、美しい真珠を作って神様にお返ししたいと思っております。(たかせ・ゆり 1948年生まれ、東京第5ワード扶助協会教師)



エライジャのみた まに助けられて



鹿児島地方部都城支部

安藤 嘉章

私がまだ独身で、教会に入り6カ月ほどたったある日、私の出身の名古屋第1ワード部でも、系図4代のチャレンジがありました。まだ教会についての知識も浅く、何をどうしてよいやら分からなかった頃、私はトラックの運転手をして、名古屋―大阪、東京、富山などを走っていました。毎日が忙しく、とても系図の資料を取りに行く暇がありませんでした。それでも教会の福音を聞き、この教会の教えが真実であるとの証が強くありましたので、この系図のチャレンジも心から受けたいと思いました。

私は毎日どうしたらよいか考え、祈りました。私の父は岐阜県出身なので岐阜市役所に行かなくてはならず、母方は愛知県阿久比と半田（共に知多半島）に役所があるのです。よく考えた末、会社に訳を話し、どうしても1日休みをもらおうと決心しました。そして勇気を持って配車係に行き、

話そうとした時、「安藤君には、きょう岐阜県に行ってもらおう」と先に言われ、びっくりしました。

私はすぐ車を走らせ、仕事を素早く終わらせてから市役所に向かいました。そして仕事から帰り、神様に感謝し、明日こそ仕事を休み、母の実家のある役所に行くことを決意し祈りました。

次の日の朝、また会社に行き、いざ話そうとすると、なんと、その仕事は半田に行く仕事だったのです。再び驚きました。私には訳が分かりませんでした。

そして、その後系図を進めるたびに、必要な資料を同じように仕事の途中に寄り、取り寄せることができたのです。

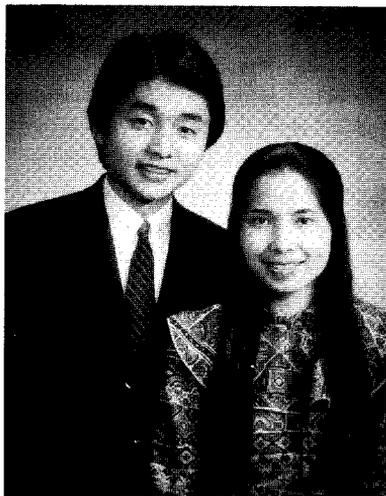
その後2週間で4代、5代の系図を書き終えました。しかし、今も私の系図の仕事は残っています。系図の作業は、ライフワークとも言うべく生涯にわたり、進め、見なおし、先祖に心を向け感謝する大切な時間であることが分かりました。私はあの時の素晴らしい経験を思い出すたびに1ニーファイ3章7節の聖句を思い出します。「そこで私ニーファイは、私の父に『私は主が命じたもうたことを行って行く。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前^{より}てある方法が備えてあり、それではなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである』と言った。」

主は教会の指導者を通して私たちにチャレンジを与えて下さいます。いつも勇気をもって祈り求め、行なおうとする時、私たちを必ず導いて下さることを証致します。

（あんどう・よしあき 1957年生まれ、鹿児島地方部評議員）

永遠の伴侶 との出会い

♥職場での伝道
により改宗



大阪北ステーキ部岡町第2
ワード部（元名古屋伝道部
専任宣教師）

西川 敦子
（旧姓・大坪）

私と婚約者西川兄弟との出会いは、私にとっては予期せぬ出来事でした。今振り返ってみると確かに神様の助けと導きを受けていたように思います。

ピッピー、ツッー。UPI、APのワイヤーの音、ひっきりなしに鳴る電話の音。私が働いているのは、東京にあるアメリカのテレビ局アジア支局のニュースビューローです。

まだ勤め始めて間もない私は、事の成り行きを後から追っていくのがやっとなです。この目まぐるしい職場の中で、ただひとつ救いなのは夕方5時からアルバイトで入ってくれるナイトスタッフの5名の学生さんたちの存在です。毎日ひとりずつ交代でやって来る彼らの屈託のない笑顔を見ると一日の疲れもとれ、ホッとします。その中でも西川兄弟（この時はまだ教会員ではありません）は、私にとって人一倍親近感を持って、オフィス全体にいつも何がしかの温かみをもたらしてくれる人でした。マスコミの世界にあって彼の存在は、私の目にいつも新鮮に映りました。

仕事に慣れてくると、職場での伝道ということ真剣に考え始めました。そのために短い時間ながらも、仕事の合間に、福音に添った自分自身の将来の夢をみんなに少しずつ話していきました。特に驚いたことは、アメリカのニュースを直接テレビで伝えるニュースキャスターの方々がモルモンについて正しい知識を持っていて、非常に友好的に私に接して下さることでした。

ある日、ヒューストンから中国に特派員が派遣されることになり、その特派員の方が東京に立ち寄られました。その方は私がモルモンであることを他の人から聞いて、

私の所にわざわざ握手を求めて来られました。以前ユタ州に住んでいたことを話す彼を見て、モルモンに対して、何かよいものを感じていることが一目で分かりました。この出来事をきっかけに、勇気づけられた私は、職場での伝道に一層意欲を燃やしました。

私の職場であるニュースビューローでの伝道というのは、毎日の仕事に分刻みで変わることもあり、机にゆっくり座って福音の祝福について語ることは、とても困難でした。それで最初に思いついたのは、このビルの中で、一番接する機会の多い人に伝道することでした。

オフィスが日本テレビの社屋の中になりましたので、まず受付嬢の方と親しくなりました。2週間後には、宣教師からレッスンを受け始めましたが改宗までは至りませんでした。しかしながら貴い福音の種をまく機会があったことを主に心から感謝しました。また、オフィスの中では、一番若いナイトスタッフの学生さんたちと短いながらもできるだけ接する機会を持ちました。交代で入ってきて、テレックスを打っている時間に、こちらから積極的に話しかけ、福音に添った考え方を話し、若い人が何に関心があるのかよく理解できるよう努力しました。

毎日、2～3分の会話が3カ月、4カ月と続いていく内に、若い人々が、何かを求めていることに気づきました。頭の中に「神の子です。わたしやあなた」という歌詞が鮮明に浮かび上がり、私たちは皆、神様の同じ子供なのだとの思いで一杯になり、一人一人が持っている神様からいただいている特別な賜について考えるようになりました。

た。その中でも、西川兄弟は、私の話を一つ一つ真剣に受け止め、考えてくれました。そんなある日、ある出来事を衛生中継することになりました。その時、夜の時間帯で働いていたのが西川兄弟で、仕事を通して彼の誠実さと愛を深く学ぶことができず、いつの間にか、彼にほのかな思いを寄せるようになりました。

12月6日の土曜日、仕事の休みの日、呼び出しがあり、オフィスに行くと、丁度西川兄弟と入れ違いになりました。この機会を逃したら、福音を伝えるチャンスを失ってしまうという強い気持ちがわいてきて、私の方から映画「駅」を見にいかないと誘いました。それをきっかけに、私たちのコートシップが始まったのです。

わたしは会う度に教会を通して受けているたくさんの祝福、将来の夢について、2時間も3時間も彼によどみなく語りました。そして、最初宗教の話に否定的だった彼も、私の夢が彼の夢に相通ずるものであることから、いつの間にかお互いに結婚のことを真剣に考え始めていました。彼は自分の方から私の愛するステーキ部宣教師の正木姉妹（旧姓）と約束をとってレッスンを受け始めました。

「愛があれば何でもできる」という彼の言葉が私に大きな励みと希望を与えてくれました。私たちの出会いが決して偶然ではないと直感したのです。彼は、私にとって貴いまた尊敬できるかけがえのない人になっていました。

今でも決して忘れることのできない1982年1月9日、たくさんの人々の見守る中、西川兄弟のバプテスマ会が東京ステーキ部恵比寿ワード部で執り行なわれました。

「やってみなくてはわからない」と彼が言った日から1年以上の年月が流れ、その間、「つぼみを見つけなさい」と言って下さった指導者の言葉をやっと理解できるようになりました。「すなわち、これはまことに善い種子、善い言葉に違はなく私の心を大きく開き、私の理解力を増し、わたしはようやく善い味を感ずると。」(アルマ32:28)

主はすべての事を御存じです。私たちが努力し、求めるならば、私たちの自由意志の選びによって、身近な所で永遠の伴侶に巡り会えるということを強く感じるのです。

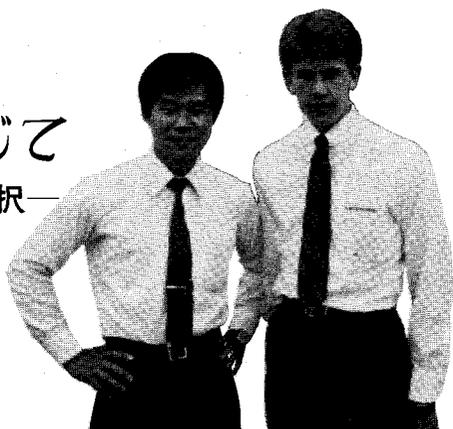
この1年、西川兄弟の成長を目の当たりにし、今では、彼から多くの助けと愛をいただいています。そしてこのような経過をたどるまで、多くの人々の助けと温かい励ましがあったことを心より感謝しています。あす5月27日、西川兄弟との神殿結婚をひかえ、彼のすべてを受け入れ、細くて長い道をふたりで仲よく歩いていきます。(にしかわ・あつこ 1954年生まれ、岡町第2ワード部扶助協会教師)

結婚や仕事に先んじて

—より良いものを得るための選択—

東京北伝道部専任宣教師(名古屋西
ステーキ部名古屋第3ワード部所属)

新田 元一



私は改宗してからも多くの素晴らしい宣教師に出会いましたが、自分が宣教師になることについては消極的な気持ちしか持っていませんでした。自分には厄介な問題が山ほどあると思込んでいたのです。

学生時代に改宗し、卒業後はある設計事務所に勤めました。さらに社会人としてまだ半人前のうちに、教会で支部長という召しを頂きました。私なりに努力を重ねたつもりですが、会社と教会でも自己の能力のなさや信仰の弱さを認めざるを得ないよう

な状態に何度となく直面させられました。ただ、多くの素晴らしい指導者や会員の方々からの助言と励ましを胸に、熱心に責任を果たそうとする時、それなりに充実感を味わうこともありました。

しかし、いつも意識的に避けようとしている思いがありました。伝道に対する思いです。その当時、私には親しく交際していた姉妹との結婚を考え、さらに設計士になるための勉強と支部長としての責任に全力を尽くしたいと常々思っていました。そんな時、みたまが警告を与えてくれました。

ふたつの重荷を背負い、苦しい坂道を歩んでいた私でしたが、よく祈り、今何が最も必要で大切かを判断しようとした時、みたまの導きに従いなさいとの答えを得たのです。

それからは、伝道に対する悲観的な面、つまりそれによって失われることについては考えず、伝道によって得られる祝福のみを考えるようになりました。愛するということを学べる一生で最も素晴らしい機会であること、主のみ業に携わることの祝福などです。また神殿での祈りの時も、以前感じた結婚や責任についての思いよりも、伝道を決心した時のそれは、さらに確信と希望で心が満たされました。

伝道に出るためには、今ある良いものを犠牲にする必要があります。故タナー副管長は、「犠牲とは今ある良いものを捨て、さらに良いものを得ることである」と述べられました。克服すべき問題は数多くありましたが、できる限り祈りと模範を通し努力しました。幸いにも仕事では所長の積極的な理解が得られ、結婚については姉妹とよく話し合い、お互いに伝道の必要性を感じ、ご家族にもお会いして、その決心と将来の計画を伝えることができました。また最大の難問であった自分の両親への説得の場面は、つい昨日のこのように思い出されます。それは昨年暮れに両親が名古屋に向いてくれた時のことでした。

私は前もって天父に助けを祈り求め、心に確信を得ていましたので、単刀直入に伝道についての決心を話しました。当然のごとくに、驚きと強い拒絶の言葉が返ってきました。またそれに伴うであろう問題が次々と並べられてきましたが、自分でも覚悟

していたことなので、とりたてて心配はしませんでした。以前ならあのような時に必ず議論し、口論した私でしたが、その時は祈りによる確信を得ていましたので、落ち着きと自信をもって応えることができました。そして、伝道から得られる素晴らしい祝福を強調し、自分の将来へのビジョンを順序よく話しました。父はその間しばらく黙っていましたが、私は父の心の目を見るつもりで目を合わせ、聖霊を通して父の心を和らげたもうように一心不乱に天父に祈り求めました。

すると傍らに座っていた母が、父を説得し始めました。その時を境に徐々に雰囲気が変わっていくのが感じられました。聖霊の働きを身をもって感じる事ができたのです。父は今まで見てきたどんな目よりも優しく温かい目差しで私を見てくれました。あの一度決めたら頑として受けつけない父が、たった2、3時間の話し合いで自分のビジョンを譲り、さらに経済的な不足をも援助しようとさえ言ってくれたのです。それは私にとって奇跡以外の何ものでもありませんでした。

私は決してこの経験が自分だけの特別なものとは思っていません。天父はすべての兄弟姉妹を愛され、助けようとしてくださいます。しかし、私たちが心をかたくなにしている以上は、天父は十分な助けを与えることはされません。ですから、天父に対し、いつも従順で謙遜でなければなりません。自分の子供が悩んでいるのを見て放っておく親はいませんが、子が親に悩みを打ち明け、心を開かない限り助けられないのです。どうぞ皆さん、天父に対しかたくなな心を持つことのないようにしましょう。いつも

恵み深く愛情豊かな天父と主に思いをはせ、どれほど私たちのために忍耐されているかを深く感じ祈り求めましょう。そうすれば言葉で言い尽くせない心のうめきも聞き届けて下さることでしょう。

素晴らしい指導者の助けと模範、さらに愛すべき兄弟姉妹の励ましと家族の援助によって伝道に出られたことを深く感謝しています。まことに天父と主が生きておられ、この教会が真実の教会であることを心より証致します。(あらた・もとかず 1959年生まれ)

神様の愛とみ守りを満身に受け

東京北伝道部専任宣教師(三重地方部
鈴鹿支部所属)

古鉄 英治



□ 本人宣教師はアメリカ人宣教師に比べ、多くの面で犠牲を払って伝道に出ています。大切な会社をやめて伝道に出たり、家族からほとんど手紙の来ない人もいます。私が払った犠牲はそれらの人に比べると小さなものでした。

私は3年半前に1枚の英会話のチラシがきっかけとなり教会に行くようになりました。その頃、宗教は弱い人間がするものだという偏見を持っていましたが、宣教師の熱心な教えと愛に心を動かされ、悔い改めてバプテスマの水をくぐりました。

教会に入ってから私は段々と変わっていきました。神様の福音が私を変えたのです。しかし、私は決して模範的な教会員ではありませんでした。戒めを破って教会をお休みしたことが度々ありました。

ある安息日の集会で、素晴らしい伝道を終えてもうすぐアメリカへ帰ろうとするひとりの宣教師が「神様のことを一番よく理

解するには伝道に出ることです」と最後の証を述べました。

その証は私の心に深く突き刺さり、今の自分を省みて、このままでいいのだろうか、という疑問がわき上がりました。主の再臨の時、自分が主のみ前に出て正しい者であるかどうか不安でした。もっと成長したい、もっと神様に近づきたい、否定できないような素晴らしい証を得たいという思いが胸の中で強まりました。私の所属していた支部には何人も帰還宣教師がいましたが、彼らの模範を見るにつけ、私も伝道に出たいと思うようになりました。

支部長に伝道に出ることを相談したところ「19歳から伝道に出られますから、古鉄兄弟はあと1年半あります。その間にまず両親の許可を取り、伝道資金(当時、2年間の伝道資金として150万円チャレンジされました)を蓄え、福音の系統的な学習を通して個人の証を強め、ふさわしい生活を送

るように……」とチャレンジを受けました。

私はまず両親に、伝道に出たいとさりげなく伝えました。すると教会に対して今まで何ひとつ反対しなかった両親が初めて反対しました。「ああやっぱり反対されたか。」落胆はしましたが、主にあってできないことはないとの確信がありましたので、それから毎晩、伝道に出られるように天父に祈りました。一押し二押し、三に押し、折を見ては、両親に伝道の素晴らしさ、価値について説明しました。何回か話し合いましたが、ぬかに釘を打ちつけるようなものでした。しかし、段々とぬかから木に変わっていったのです。

ある日一番強く反対していた母が、伝道に出てもいいと許してくれました。私はこうなることを信じていましたが、一瞬自分の耳を疑いました。おそらく両親も私のためにどうしたら一番いいか、何回も話し合ったに違いありません。その日の夜、両親の深い愛と思いやりに心より感謝し、主に感謝の祈りを捧げました。

しかし、問題はすべて解決されたわけではありません。たくさん問題が山積みされていました。

高3の7月のことでした。母と担任の先生と進路を決める面接がありました。学校の先生もちろん反対しました。「君はそんなことしていただらいかんど。よく考えてみなさい。」

学校の先生が心配して下さるのは有り難いのですが、自分の決心は変わりません。最後には先生も許して下さったのですが、伝道に出るまでの1年間はどうかということが問題になりました。就職するにしても学校では、1年しか働けないような

者は紹介することはできません。そのため自分で仕事を見つけなければなりません。家でアルバイトをして働くことでもできたのですが、つい甘えてしまいそうだったのでやめました。そして、ある兄弟の厚意により、三重県にある大きな自動車会社で期間従業員として働いたらどうかという話が出ました。これですと11カ月くらいでやめることができ、しかも1カ月の手取り額が18万円から20万円くらいになるので十分伝道資金を貯めることができます。その代わり、仕事は交替制勤務で、残業を含め一日12時間くらい働きます。今度は学校の先生や家族、親戚まで反対しました。私は断食し、お祈りした結果、そこに行った方が良いという結論を得ることができ、家族も学校の先生も許してくれました。

確かに仕事は大変でした。最初の2週間で私より仕事の経験が豊富な大人の4分の1がやめていきました。他の人々が仕事を終わって帰っても、私はその後、残り3時間半残業しました。朝7時から夜7時まで、昼の12時から夜の12時まで働きました。疲れて、帰って休みたいと思っても伝道資金のためと歯を食いしばって働きました。その経験が私に忍耐して働くことを教えてくれました。それは伝道に出るからとても役に立ちました。また、神様は多くの試練を与えられ、謙遜になり、神様の力を求めることの大切さを私に教えて下さいました。

働いて6カ月目、会社の課長に呼ばれました。課長は、人員整理のため会社をやめてくれと言いました。私は期間工でしたので嫌と言えない立場です。その時の私は茫然自失の有様といったところでした。

会社を今やめたら私の伝道に出る計画は

大きく狂ってしまいます。私は「もう駄目か」と思いました。しかし次の瞬間、「いやこれからだ。」心の中にわき上がるみたまを感じました。「この会社で働くことは神様のみこころにかなっている。とすると神様は前もってある方法を備えておられるはずだ。」私はひとりになると神様に祈りました。

祈りの答えは胸の中に温かい、神聖な気持ちとして与えられました。「よし、僕は会社に残れる。あとは自分の努力だけだ。」私は確信を得ると、会社に残るために一生懸命努力しました。それからいくらか紆余曲折を経ましたが、残り5カ月間その会社で働くことができました。

私はその頃、地方部宣教師の召しを受けて働いていました。会社の人、寮の人に教

会のことを紹介しましたが、なかなか改宗に導くことはできませんでした。しかし伝道に出る2カ月前に同じ寮の人で、いままで一度も話したことのない人と知り合い、神様の導きにより、その人をバプテスマに導くことができました。

こうしてついに昨年の4月、相良伝道部長により、啓示と権威ある者の按手により、神によりて宣教師の任に召されました。

宣教師に召され1年2カ月になろうとしていますが、伝道はこの地上で一番貴い仕事です。私はこれほどまでに神様の強い愛とみ守りを身近に感じたことはありません。主のぶどう園で働く喜びは何にも換えがたいものです。ひとりでも多くの兄弟姉妹にその喜びを味わっていただきたいと思います。(こてつ・えいじ 1962年生まれ)

菊手を待ちつつ

JMTC第49期生35名



● 六月に召された三五名の日本人宣教師。六月二日から二九日までの九日間、教会管理本部でトレーニングを受けた。



教 会教育部東京渋谷インスティテュートの事務所が、7月26日付で黒川ビル（東京都渋谷区桜丘町3-4）から教会管理本部渋谷ビル（渋谷区桜丘町28-8＝渋谷ブックセンターと同じビル）の4階に移転しました。

前期（1982年4月15日～7月23日）の授業では約300名の学生が登録し、熱心な福音学習を通して伝道や神殿結婚の備えなど、信仰・証を強め、イエス・キリストの福音を実生活に取り入れようと励みました。またこれまで80名のフルタイム宣教師が同インスティテュートから伝道に出ました。

現在、後期（1983年9月21日～1984年1月27日）の登録を受け付けています。カリキュラムについては時間割を御覧下さい。



東京渋谷インスティテュート、渋谷ビルに移転

●教会教育部●

●新住所

〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8
 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京渋谷インスティテュート(4F)
 TEL 03-496-6954

■教会管理本部渋谷ビル■

5階	社会福祉課／資料管理部視聴覚センター
4階	教育部／東京渋谷インスティテュート
3階	教室
2階	礼拝堂（恵比寿ワゴンド部・東京第1ワゴンド部・外人支部）
1階	資料管理部渋谷ブックセンター
地下	多目的ホール

●1983年度後期時間割

時間	午前9時 ～10時半	11時 ～12時半	午後1時 ～2時半	3時 ～4時半	6時45分 ～8時15分
火曜日	×	×	130	342	302 130 122
水曜日	×	×	325	122	411 342 325
木曜日	×	×	130	411	345 130 160 122
金曜日	×	×	130	302 122	160 333 345 212 325
土曜日	325	302	122	×	×

コース番号とコース名

- 122—「モルモン経」アルマ書第30章～モロナイ書
- 130—「福音を分かち合う」
- 160—「日の光栄の結婚の準備」
- 212—「新約聖書」使徒行伝～ヨハネの黙示録
- 302—「旧約聖書」列王記上～マラキ書
- 325—「教義と聖約」第76章～138章
- 333—「生ける予言者の教え」
- 342—「末日聖徒の歴史」1845年～現在
- 345—「歴代大管長」
- 411—「イエスのたとえ話」

編集室から

➔「各地のたより」「私の証」「職業と信仰シリーズ」などの原稿を募集しています。

➔11月号掲載分締切は9月20日（必着）です。投稿には必ず連絡先（電話番号）を記入して下さい。宛先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。

訂正 7月号146ページの大阪伝道部長ブックとあるのはプレブックの誤りです。おわびして訂正します。

